素養の乏しい初學者が讀んでわかる筈はない。わかつたところで、純粹經驗論は、直ちに信ずることの出來ない說である。自分は、受驗記を書く者の心理をよほど不思議に思つて居る。知名の人の書いたむづかしい書物のみを學げて、それによつて、自分をえらく見せようとするさもしい根性、これが學問上の官僚式根性でなくて何であらう。獨學者の最大特徵は、あらゆる點に、不羈獨立の自由をもつて居ることにある。學問上に於ても、世の中が非常に廣く見えることである。學校を卒業した者は、其の敎師から種々の暗示を受ける。自分の師事した人の學說や研究法のみを是認し、他のものをすべて排斥しやうとするのが、古往今來學校出身者に共通せる特徵である。獨學者には、さうした暗示を受ける者がない。此の不羈獨立であるべき獨學者の中に、學問上の官僚式根性の濃厚な者が非常に多いことを見て、自分は、いつも不思議に思つて居るのである。ついでに述べて置くが、獨學者には、もう一つ厭ふべき缺點を生じやすい。それは、前と全く反對に、極端な反官學思想に囚はれることである。さうして、其の反動として、民間の學者のみを自分の味方のやうに思ふ。民間の篤學者を認めるといふことは、非常によい。これは、社會全體に希望したいことである。社會全體が民間の篤學者を認めるやうになれば、今日の如く、學校ばかり澤山つくらなくても、文化といふものは進步して行く。併し、反官學的な思想から、實力もない自己宣傳者までも、獨創的な新思想家のやうに思ふに至つては、不見識を通り越して居る。獨學者は、かう云ふ弊に囚はれぬやうにして、自由に自己の心境を開拓し、正しい批判力を養ふことが必要である。

一度び基礎的知識が確立したらば、これを育成して進步發達させ、全體系の完備に努めなければならぬ。而して、此の基礎的知識を育成するものは、讀書と思索である。自分は、いつもこれを植物に譬へて見る。植物が生長して行くには、日光と養分とを必要とする。知識や思想の體系を植物に譬へるならば、日光に該るものは思索であり、養分に該るものは讀書である。世の中には、讀書といふものを非常に重んずる人と、全然これを輕視する人とある。兩極端はよくない。讀書は、知識や思想の體系を育成する方便である。養分を與へない植物が衰弱して行くやうに、讀書しない者の知識や思想は、いつか枯渴する時が來る。併し、讀むべき書物に讀まれてはならない。植物に養分が必要だからとて、妄りに肥料を施せば、やはり發育を害するやうになる。讀書の目的といふことを忘れぬのが肝要でらう。此の知識の體系を育成することに就いても、倫理學や敎育學は、數學や自然科學と大に趣を異にして居る。數學の如き學科は、極めて少數の書物によつて、根本的の原理を會得してしまへば、群書を涉讀する必要はないかも知れない。倫理學や敎育學は、少數の書物を精讀して、自分の思想系統が略ぼ定まつても、それだけで拋棄したら、その體系はいつまでたつても伸長しない。思索と讀書によつて、絕えずこれを培養して行かなければならぬ。此の意味の讀書は、廣く讀み、多く讀むほどよい。卽ち、多讀主義を可とする。併し、多讀と云つても、あらゆる書物を一々一字一句も殘さずに讀む必要はない。既に確立して居る自己の思想の體系を培養するに必要な養分だけを取ればよいのである。書物の數は非常に多いが、全然內容の異なるものは少ない。例へば、「倫理學概論」といふ名の書物は澤山ある。併し、其の中に書いてあることは、大同小異である。倫理學といふものゝ體系が自分の思想の中に成立して居れば、甲乙丙丁の「倫理學概論」を一々隅から隅まで讀むには及ばない。一瞥して、各卷の異同を知り、必要な部分だけを抄讀すれば十分である。中には、目次だけ見ておけばよいのもあり、序文だけですむものもある。讀書の方法を知らない者は、讀む必要のない書物まで全部通讀しようとする。勞力を徒費するのみである。何の効能もない。殊に

基礎的知識も出來て居ないのに、あれこれと亂讀するのは、却つて、讀まない方がよい位である。自分は、多讀癖を有して居る。あらゆる書物を盡く見なければ滿足の出來ない者であるが、全卷を通讀した書物といふものは何程もない。良書は、三讀し、四讀し、甚だしきに至つては、其の一部を筆寫したり、表解したりして見る。併し、多くの雜書は、長くも一週間、少なきは、二三時間位で一覽してしまふ。內容の同じものを幾種類か讀んだり、讀んで得るところもないものに時間を費やすことは、有限の生涯を無益に濫用するものと思ふ。

要するに、少數の良書を精讀して基礎的の知識を確立し、此の基礎的知識を培養するために、たるべく多數の書物を涉獵するのが讀書の秘訣である。殊に、倫理學や敎育學や、其の他これに類する思想上の學科の研究には、此の方法が必要であるといふことに歸する。

第四節　學科の範圍に就いて

然らば、如何なる書物を中心にして精讀したらばよいか。これが最も重大な問題である。

修身とか倫理とか云ふものは、範圍がかなり廣い。文檢の修身科の問題から見ると、倫理學・倫理學史・實踐倫理及び國民道德等を含んで居るやうである。故に、文檢の受驗が目的であるならば、少なくもこれだけの範圍に亙つて、確實な知識を收得しなければならない。中にも、倫理學史の如きは、西洋倫理學史と、支那倫理學史と、日本倫理學の全部を包容して居るから、これを一通り理解するだけでも大變な仕事である。併し、考へやうによつては、さうむづかしいことでもない。何となれば、文檢は、非常に深い專門學的知識の有無を試驗するものでなく、たゞ、中等學校の生徒に、其の學科を講述するだけの實力——卽ち一種の高等常識の有無の檢査に止まるからである。深い專門學的知識の試驗ならば、修身といふやうな廣い範圍から問題を出すのは無法である。倫理學とか、西洋倫理學史とか、或は、尙ほ一層細かに分科しなければならぬものである。殊に、日本倫理の如きは、まだ十分に研究が出來て居ない。第一、試驗委員として擧げる人がなからう。修身といふやうな廣い漠然とした範圍にしてあることが、文檢の性質を明瞭に語つて居る。深い專門學的知識を要求しないものとすれば、前に揭げたやうな範圍の受驗は、決してむづかしいことではなく、また、あまり長い年月を要することでもない。其の人の才能によつて一概にはいへないが、一年か一年半位の準備で十分に合格し得るものと思ふ。多少の豫備知識があれば、五六箇月でもよからう。最も有效な研究（嚴密な意味からいへば、研究とは云はれないかも知れない。）の方法は、前に擧げた範圍、卽ち倫理學・西洋倫理學史・支那倫理學史・日本倫理學史・實踐倫理・國民道德等の各部門に亙り、各一二冊づゝ中心とすべき書物を選定してこれを熟讀し、基礎的知識をつくり、其の上に、出來るだけ多くの書物を參照することである。最初から同じ種類の書物をあれもこれもと涉讀するのは、時日を空費するのみで、更に效能がない。さうかと云つて、僅かに、五六冊の書物を讀んだだけで受驗するのも冒險である。精讀と多讀とを併用する讀書法が最も堅實であることを自分は確信して居る。基礎的知識をつくるには、ノートへ書き拔く者もあり、書物の中へ記入したり、圈點を附したりする者もあるが、これは何れでもよい。個人々々の適宜にしたらよからう。

第五節　參考書に就いて

中心として精讀する書物の例を擧げるのもどうかと思ふが、少しばかり意見を述べて見よう。これも學校といふものの恩惠を受けて居ないお蔭で、忌憚なくものが言へる。先生の著書だから、どうのかうのといふ遠慮が少しもいらない。此の意味に於て、自分等の言が、天下に於て、最も正直なものである。獨學者の聲は、天地の聲である。

倫理學概論　先づ倫理學概論から述べる。倫理學概論には、從來適當な書物がなかつた。初學者は、多く中島力造氏の「敎育的倫理學講義」を讀んだ。自分も、初めは此の書物を中心として讀んだ。併し、此の書物は、あまりよい書物でない。非常によくわかるやうに述べてあるが、所々に、かなり疑はしい所があるし、此の種の概論としては、稍〻粗雜過ぎる。これは、著者が自分に書いたのでなく、講演の筆記である。此の書物には限らないが、講演の筆記といふものは信用が置けない。其の理由は、他日、別に述べて見たいと思ふが、兎に角、言語による發表の確實性を、自分は、常に疑つて居る。外國でも、我が國でも、老大家の著書には、講演の筆記が多い。面白くないことである。吉田靜致氏の「倫理學講義」「倫理學要義」「倫理學演義」といふ三大著書もみな倫理學の概論であるが、同じ概論でも、これは初學者が基礎的知識を作るために讀むべきものとして不適當である。基礎的知識が出來た上で、さつと通讀すれば十分である。其の後に出たものでは、荻原擴氏の「倫理學概論」を何人にもすゝめて居る。荻原氏の著書、完全無缺とは云はない。自分から見れば、不滿な點もある。併し、此の書は、前に述べた明瞭・正確・包括的といふ三條件をよく具備して居る。今まで出た概論の中で、初學者の讀むべきものとして、最も適當なものと思ふ。土屋幸正氏の「倫理學原理」といふ書もよいが、倫理學概論の全部に亘つて居ない。大鳥正德氏の「倫理學概論」も非常にわかりのよい良書であるが、少し簡單過ぎて述べ盡さない點が多いやうに思ふ。要するに、「倫理學概論」は、荻原氏の著書を精讀して、基礎的知識を確立し、參考として前記の吉田・土屋・大鳥氏の著書をはじめ、藤井健治郎氏の「主觀道德學要旨」、西田幾多郎氏の「善の研究」、大西祝氏の「倫理學」等を通讀すればよい。併し、これは、一々詳細に讀むには及ばない。尤も、藤井博士の說、西田博士の說を、徹底的に理解しやうと思ふならば別問題である。

或る雜誌を見たら倫理學の參考書として、中島博士の「敎育的倫理學講義」とリップスの「倫理學の根本問題」だけを擧げて居た人がある。どういふ意味であらう。中島博士の著書が完全なものでないことは、前に述べた通りである。リップスは心理主義の人格說を唱へて居る者である。人格說には、外に論理主義の人格說もあり、絕對主義の人格說もある。また人格說の外にも、或は功利主義、或は個人主義、或は直覺主義、種々樣々の學說がある。代表的な學說を理解して置くといふ意味なら、少なくも、グリーンの說、シヂユウイツクの說、スペンサーの說は、同等な注意を拂つて見なければならぬ。コーエンやシュプランガーまで概見すれば尙ほ一層よい。不完全な中島博士の著書一冊と、リップスだけ讀んでどうするつもりであらう。初學者は、決してかうした偏頗な讀書法を取るべきでない。尙ほ「倫理學の根本問題」には二種の譯が出て居る。リップスの說を理解するだけならば、阿部次郎氏の譯の方がよい。藤井博士の譯は、非常に力のはいつたものと聞くが、阿部氏の譯ほどよく意味が徹底して居ない。藤井博士は實に尊敬すべき學者であるが、譯文に於ては、阿部氏の半分も才能がない。勿論、文の才のないことは、學者としての藤井氏を傷け

るものでない。

倫理學史　倫理學史には、西洋・支那・日本の區別があるから、先づ西洋の方から述べて行くことにする。

「西洋倫理學史」にも良書と認むべきものが一冊もない。中島力造氏の「倫理學說十回講義」は、よくわかるやうに述べてあるが、全部に亘つて居ないから、初學者の基礎的知識をつくる書物として甚だ不適當である。北澤定吉氏の「倫理學史綱」は、簡明な記述で、かなり力のこもつたものであるが、あまりに難解である。吉田靜致氏の「西洋倫理學史講義」は、尨大な割合に內容が乏しい。叙述が冗漫で不得要領の點もかなり多い。今日では絕版になつて居るから、手に入れることも中々困難である。價格の如きも定價の何倍かに騰貴して居る。試驗委員の著書なるが故に、かくの如きものまでも探し出し、高價な代金を拂つて讀まうとする者のあるのは笑止である。試驗委員といふ者の罪深きことを痛感する。今日まで出て居る倫理學史に通有の缺點は、哲學の思想系統を明かにせず、倫理思想のみを述べようとしたことである。勿論、倫理學史本來の性質から云へば、さうあるべきことである。併し、西洋の倫理思想は、哲學思想の系統の中に生長して來たのである。哲學思想を解せず、倫理思想を解することは不可能である。初學者の必讀すべき倫理學史は、倫理思想と共に哲學思想の變遷を叙述したものでなければならぬ。若し今までの書物によつて倫理學史を會得しようと思ふならば、大西博士の「西洋哲學史」等に基づいて、自分にノートを作るより外はない。

支那倫理學史では、宇野哲人氏の「支那哲學史講話」がよい。既往現在を通じ、自分の見た範圍では、種々の點に於て此の書が最も優れて居る。複雜な不可解な支那の思想を、かくの如く明晰に、かくの如く平易に叙述したのは、實に敬服すべきことである。東洋哲學の研究者には、外に服部宇之吉博士の如き尊敬すべき碩學もあるが、古今を一貫した哲學史の著書を公にして居ない。從來、支那哲學史として出たものは、何れもみな支那の思想を詳しく紹介したといふだけのことで、學界に貢獻せる功績は多大であつても、哲學史として、何となくもの足りないものばかりであつた。宇野博士の著書によつて、はじめて支那哲學史に接したやうに思つた。此の書は、非常に平易に書いてあるから、初學者が基礎的知識を作るに最もよい書物であるが、單にそればかりでなく、深く支那哲學の研究をする者も一讀しなければならぬものと思ふ。他の書物にない創見的な點もかなり多いからである。自分は、はじめて東洋倫理學の研究をはじめた時に、種々の書物の中から宇野博士の「東洋哲學大綱」といふものを發見した。これを一讀するに及び、其の明晰なる叙述に感じ、其の書を中心としてノートを作り、他の書を參照して不足の分を補つた。當時の宇野博士は、まだ今日ほどの名聲なく、たゞ新進の一學究に過ぎなかつたが、自分は博士の著書精讀者であつた。此の「東洋哲學大綱」は、現在の「支那哲學史講話」の前身ともいふべきである。此の「支那哲學史講話」ほどの書物が「西洋倫理學史」及び「日本倫理學史」の方面にもあつたならば、どれだけ初學者を裨益するであらうかと、時々自分は思ふ。尙ほ支那の倫理思想を理解するには、哲學史の外に主要な原本を讀まなければならぬ。殊に四書だけは精讀して置く必要がある。十三經の全部に就いても大體の知識がなければならぬ。四書の解釋も、倫理學の研究者には、宇野博士のが最もよいが、惜しいことに「論語」と「孟子」とが出て居ない。

日本の倫理學史も、西洋の倫理學史と同じやうに、初學者の讀むべき良書がない。日本倫理學史に就いては、前に述べたから反覆を避けるが、井上博士の三派哲學だけでは十分でない。加之、三派哲學は、初學者の讀むべき書物として稍〻詳し過ぎる。故に、これも井上博士の著書や、有馬氏の著書や補永茂助博士の「日本倫理思想の系統」等を參

照してノートでも作るより外はあるまい。基礎的の知識が出來たら、更に一度、井上博士の三派哲學を精讀したいものである。

實踐倫理及び國民道德　實踐倫理學にもよい參考書はない。中等學校の修身教科書位を精讀するより外に適當な研究法はない。實踐倫理學と名のつくのも數種出るには出て居るが、多くはみな修身教科書を敷衍した教訓書のようなものばかりである。修身教科書の方が簡明で文字の洗煉してあるだけよい。

國民道德は、是非井上博士の「國民道德概論」を讀まなければならぬ。此の國民道德といふ言葉は、かなり前からあつたやうであるが、もとはたゞ漠然と用ひられて居た。井上博士の力によつて國民道德といふものの思想體系が成立したのである。此の意味で井上博士の著書は、どうしても讀まなければならぬ。井上博士の著書だけでわからない點があらば、深作安文氏や吉田熊次氏の著書を參照するもよし、また近時出て居る、新進の人々の著書を併讀するもよい。それ等は、各自の適宜にしたらよからう。

尙ほ參考書に就いては述べることが多いが、これだけにして置く。自分は「日本倫理學史文獻」編纂の必要を感ずる。明治以後の部だけは、早く公刊されたらと思つて居る。明治以後に於ける倫理學關係書の主要なものを盡く解題したものが欲しい。

第六節　自分の著書に就いて

最後に、自分は、倫理學關係の著書を出して居るから、自著に就いて一言して置きたい。自分は、今日までに倫理學關係の書物を六冊出して居る。「西洋倫理學史」「日本倫理學史」「輓近倫理學說研究」「倫理學說大系」と、ずつと前に書いたもので最近に出た「國民道德要領講義」である。自分の書物は、獨學自修の經驗に基づき、既刊の諸書を參考とし、出來る限りは原本にも觸れ、平易と親切とを旨とした通俗的・講義的の解說書である。例へば、「日本倫理學史」で云へば、井上博士の三派哲學をはじめ、あらゆる書物を悉く讀破し、どの書物にもないもの、または外の書物の說明の曖昧として居るもの、卽ち二宮尊德の說の如きものは、報德教に關する種々の原本を參照してまとめ、不完全ながらも全體に通じたものを示したのである。獨創的の研究ではないが、これを書くには、かなり多くの書物、出來るだけ廣く文獻を獵り、非常な苦心をして書き上げたものである。またこれを叙述するに當つては、一字一句も苟くもせず、推敲を重ねたものである。此の點だけは、何人にも誇ることが出來ると確信して居る。自分は、倫理關係の特殊問題の研究を本領として居る者であるが、現在も今後も學校の講堂へ立つて學生に講義しようと思はないから、せめて筆を以て倫理教育に關する一通りの講義をしたいといふ考へから、今後もまた從來と同じ性質の書物を書き續けて行くつもりである。云はゞこれは紙上講義叢書とでも名づけてよいものである。尙ほ自分は趣味と研究とを一致させてしまふこと、否寧ろ趣味の中に自分といふものの全體を沒了させて生きたいと考へて居る者であるから、趣味の誘ふところによつて、思ふがまゝに全我を伸ばして行きたい。他の人々のやうに倫理學とか教育學とかいふものにのみ自分を着色してしまひたくない――これは一種の人生觀であるから、他から如何なる非難を受けようともいたし方がない。

自分は、自著を人にすゝめる程厚顏無耻な者でない。また多くの先輩の苦心に成れる書物を排斥して、自著の廣告をするほど不遜な考へは毛頭ない。併し、自分の書物には、自分でなければ書けないものが含まれて居る。如何に學問の深い學者でも、書けない點のあることだけは、認めて貰ひたい。初めて倫理學を研究する者に對し、自分の著書は、最も正しい案内役をするものであると自信して居る。倫理學の研究者が、諸大家の書物を繙讀する時、自分のものを左右に置き、こゝに同じやうな獨學をした者の記した道案内があると思つて呉れるならば、自分は、最も大なる滿足を感ずる次第である。（大正十四年十一月二十四日）

第二章　文檢の修身科に就いて

第一節　緒言

檢定試驗に就いては、かなり苦勞して居る人が多いやうである。私は、試驗のために苦勞して居る人に時々出逢ふ。檢定試驗を受けることの利害は別問題として、私は、これ等の人々に大なる同情を持つて居る。少なくとも試驗勉强だなどと云つて、これを輕蔑する氣にはなれない。試驗を受ける人から、種々の質問を受ける度毎に、出來るだけの注意を與へた。多忙な時間を割いて、詳しい手紙を書いたことも、何回あつたか知れない。併し、私としても時間に制限があるし、また文筆生活、讀書生活をして居ると、手紙を書くことが非常に苦痛である。それは、疲勞の度を一層激增するからである。私のやうな生活をして居ると、遊ぶ時間はあつても、手紙を書く時間はない。原稿を書いたり、讀書したりしたあとで、自由に遊べば疲勞を恢復することが出來る。執筆や讀書の後に手紙を書けば、疲勞した頭腦を更に一層疲勞させる。それが私には非常に苦しい。同じやうな質問に對して、同じやうな手紙を度々書くことは出來ないから、こゝに此の一篇を發表して置くのである。私は、文部省の檢定試驗に、何等の關係もあるものでない。私の言ふことが參考になるかどうか、其の邊は、保障の限りにあらずであるが、文檢といふものの內容をよく知らない人、修身科といふことに全く知識のない人には、多少の手引にもならうかと思ふ。

第二節　文檢受驗の利害

人によると、檢定試驗といふものを、全くつまらない努力のやうに思ふ者がある。私は、それに贊成しない。又これと反對に、檢定試驗を重大なことのやうに心得、生涯試驗ばかり受けて居る者もある。私は、それにも贊成しない。

一體、檢定試驗といふやうなものが、旣に不正則な制度である。正則な敎員の養成機關が完備し、正則な敎育を受けて敎員となることが誰にでも出來るならば、檢定試驗の制度などはなくてもよい。併し、世の中は、さう都合よく出來て居ない。敎員を養成する學校は、これを如何に增設するにしても、其の學校に入學することの出來ない者が出來

る。正則に學校教育を受けることの出來ない者、盡く素質の劣等な人間ばかりかといふと、さうではない。現に、檢定試驗を受けた人で、相等な活動をして居る者の多いことを見てもわかる。其の中の少數の者に至つては、學校で正則な教育を受けた者でも容易に出來ない程の仕事をして居る。如何に教員を養成する學校が完備しても、正則の學校教育を受けることの出來ない事情の者があるとすれば、檢定試驗のやうな制度は、いつまでも存續して置くことが必要であると私は思ふ。檢定試驗の廢止論などには、贊成することが出來ない。

中には、かういふ說を唱へる者があるかも知れない。試驗を受けて免許狀を取ることばかりが向上發展の道と思ふのは間違つて居る。向上發展を計る方法は、外にいくらもある。專心實際教育に沒頭するのも、人間として貴いことである。教育上の研究を發表することも、大に意義あることである。試驗勉强のために腦力を濫費するは、人間固有の天分を發揮する所以でない——と。私は、此の說にも反對しない。此の說には、慥かに或る眞理が含まれて居る。私は、試驗勉强といふものの弊害をよく知つて居る者である。自分が試驗のためにはかなり苦い經驗を嘗めて居る。試驗のための勉强といふことが、如何に苦しいものであるか、それが短い人生にとつて如何に無意義な勞費であるか——といふことを知らぬ者ではない。今日でも、私は、多くの學生が試驗のために苦しんだり、多くの受驗者が其の準備に忙殺されたりして居るのを見ると、試驗といふものを世の中から徹廢してしまひたいと思ふ。

然らば、試驗といふものは、全く有害無益なものであるかといふに、さうでもない。試驗にも若干の利益はある。試驗の利益といふことを全然認めない人は、獨學の經驗のない者である。獨學の經驗のある者ならば、何人も試驗に若干の利益のあることを認めなければなるまい。それでは、試驗の利益如何。私は、次のやうに答へたいと思ふ。試驗といふものは、書物を非常に精讀せしめるものである。從つて、確實な基礎的知識を築き上げる上に、試驗は最も都合のよい方便である——と。正則に學校教育を受けて居る者には、基礎的の知識を築き上げるといふやうなことは、格別必要がないかも知れない。毎日講義を聞いて居れば、自ら知識の體系が成立し、自然にそれが成長して行くからである。然るに、獨學者には、さうした便宜がない。例へば、倫理學といふ一つの學問の大體に通じようとするには、自ら進んで倫理學の書物を讀まなければならぬ。獨りで書物を讀む時に、たゞ讀むといふだけでは、其の讀み方が散漫になり易い、既に基礎的の知識が出來て居る者ならば、漫讀といふことも若干の効果はある。併し、全く基礎的の知識がなくて、徒らに讀むだけでは、寧ろ讀まない方がよいことも少なくない。世の中の讀書家と云はれる人々には、此の種類の漫讀家がかなりある。獨學者は、みな經驗して居ることであらうが、書物を精讀するといふことは非常にむづかしい。何かの目標を定めて置いて讀まない讀書は、多くみた漫讀になるものである。基礎的の知識を築き上げることの必要を認めて居ても、中々有効に書物が讀めない。かういふ場合に、試驗といふものは、怠惰な人間の心を鞭韃して、書物を精讀せしめる效能がある。試驗を受けようと思ふときには、自然に書物を精讀しなければならぬことになるのである。試驗は、無意味な詰込學問を强ひる。試驗勉强をする者は、諳記ばかりが上手になつて、應用の才や獨創の能力がなくなる——といふ人もある。これも全く外れた非難ではない。文檢の受驗に合格した者の受驗記などを見ると、如何にもさういふ感を起さゞるを得ないものがある。試驗をする委員の書物をよく諳記して合格しただけの者だといふことを思はせる受驗記がある。併し、試驗を無意味な諳記のみを强ふるものと見るのは、半面の觀察である。試驗のために應用の才や獨創の能力を枯らしてしまふ者ばかりはない。反對に、試驗を受ける目的

で確實に勉強した其の知識が基礎となつて、豐富な思想が湧き出るやうになる者もある。とにかく試驗といふものが、書物を精讀させることは、明かな事實である。徒らに試驗委員の著書を諳記して、偶然に其の諳記した所が問題となつて出たために、うまく答案を書き、運よく合格する者もあらう。併しながら、受驗者は、みなかくの如き讀書家ばかりでない。多くの受驗者は、試驗の問題を適當に解釋するために、全科の要旨を確實に理解しようとする。其の準備として、先づ種々の書物を見て、最もよいと思ふものを選擇する。一種の書物で不滿を感ずる時には、同種の書物を二種も三種も見る。書物の選擇が終ると、それを再三反覆精讀する。少しでも不審な點があれば、他の參考書を繙く。眼光紙背に徹するまで讀書しなければ止まない。內容を正確に把住するには、書物の中へ記入したり、ノートを作つたりする。かうした苦心は、獨學で試驗に應ずる者のみが味はふ所である。苦心を重ねて其の學問の內容を解釋して行く中には、他人の著書の長所や短所が非常によくわかる。學校の卒業者は、どうかすると、教師を買ひかぶる。自分の教授を受けた教師のみが偉く、他の學者が低く見えることがある。これは、學校教育が與へる最も恐ろしい暗示の一つである。非常に頭腦の鋭い秀才は、比較的かゝる暗示にかゝらない。暗示に對する抵抗力が強いからである。凡庸な者は、みな此の暗示にかゝる。同じ教師に就いて三年も四年も講義をきいて居れば、凡庸な者がさうした暗示を受けるのは當然なことであらう。此の點だけは、獨學者が誠に幸福を感ずる所である。獨學者は、豫め暗示を受ける者がない。自由自在に書物を選擇することが出來る。如何なる學者の著書でも、批判的の眼で見ることが出來る。甲の大學の學生は、乙の大學の教師を輕蔑するといふやうなことが、學校教育を受けて居る者の間には往々ある。併し、獨學者は、かゝる偏見を少しも持たない。學閥とか何とかいふものには、全然無記である。併し、私のいつも不思議に思ふのは、かくの如き公平な立場から自己の實力を築き上げて行かなければならぬ筈の獨學者の中に、妙な偏見をもつて居る者の多いことである。それは、官僚的な一種の事大思想である。此のことは、別に述べたから、こゝに反覆しない。思想上に於て、是も自由な地位にありながら、自ら型を作るなどは、あまり感心した話でない。獨學者は、どこまでも自由な心を以て、其の研究の第一歩を進めなければならぬのである。自由な心を以て、他人の著書を精讀して行く中には、自己の知識の體系が成立すると共に、諸說に對する批判力が鋭くなる。批判力が鋭くなれば、勢ひ新らしい思想も湧いて來る。試驗勉強は、獨創的の才能を枯らすものでなく、却つて創造力を發達せしめるものであるといふことにもなる。獨創的才能の枯渴するのは、其の勉強の方法が當を得て居ないからである。試驗の排斥論は、試驗の弊害を認めて、教育的の見地からこれが絕滅を期する者が唱へるばかりでなく、不勉強な者が自己の怠惰を是認するために往々これを主張する。例へば、文檢を受けやうとするやうな若い教師でもあると、無能な實力のない校長などが往々これに反對する。また新聞雜誌の創作や論文などを漫讀して、自ら思想家や、藝術家を以て任ずるやうな教師は、常にこれを冷笑する。これ等は、何れも甚だ不健全な人間である。文檢を受けたり、文官試驗を受けたりすることばかりが人間の向上進歩でないことはいふまでもない。併し、文檢に合格したとて、人間の品位が低下するわけでもない。考へようによれば、文檢位に合格出來ないような頭腦でも心細い次第である。新聞雜誌を漫讀して、附燒双の創作や感想文を書き、新らしがつて見たところでしかたがない。かうした者も、今日の教育社會にはかなり多いやうである。もつと滑稽なことには、新らしい主義や方針を標榜した小學校の教師になり、二三度其の學校の機關雜誌に原稿でも出すと、もう一かどの思想家になり、一かどの教育研究者となつてしまふ者もある。

教育社會に於て立身出世することも亦容易である。學校といふものが背景になつて、自分の虚名が人に知られて居ることに氣づかないのは、淺間しいことと云はなければならぬ。かういふ者が一度其の地位から離れると、猿が木から落ちたやうに、忽ち世間から辯られてしまふ。其の例は尠なくない。浮薄な文章などを書いて新らしがつて居るよりも、試驗を受けるために勉强する方が、人間の本質を高めるために貴いことである。併し、私は、決して、創作家志望の青年や、新思想に憧れる若い教師を排斥したり罵倒したりする者でない。たゞ何等の天分もなく、何等の努力もせず、徒らに虚名のみを趁ひ、空想のみを逞ふし、着實な勉强の風を缺く浮薄な心を憎む者である。試驗は、決して有害無益なことばかりでなく、獨學者が基礎的知識を築き上げるによい手段であると、何人にも語るを憚らない。

私は、試驗の利益を認めるものであるが、此の利益を過信する者を誡めたいと思ふ。世の中には、試驗道樂ともいふほど、試驗を受けることの好きな人がある。殆ど生涯試驗ばかり受けて居る者を往々見る。道樂とすれば差支へないやうなものであるが、これは、誠に無意味なことであると思ふ。前にも度々述べたやうに、試驗の利益は、獨學者が基礎的知識を築き上げる方便といふ點にある。試驗其のものには、大した意義もない。試驗に合格すれば、多少就職上に都合がよいとか、また社會の信用を增すとかいふ效能はあるかも知れない。併し、私は、さうした效能を考へて試驗を受けることに贊成しない。試驗を功利的に考へることはよくないと思つて居る。自己の修養を高めるため、基礎的の知識を築き上げる方便として受驗することをすゝめたい。さういふ意味に於て、私は、試驗の利益を認めて居るものであるから、試驗といふものを餘りに重大視したくない。生涯、試驗ばかり受けて居るやうなことは、甚だ無意味であると思ふ。試驗は、或る一定の時期に止めて置き、それから後は、築き上げた基礎的の知識を更に深めて行かなければならぬと考へて居る。文檢の應募者には、徒らに多くの科目の免許狀を取らうとする者がある。私も嘗てそんなことを夢みた經驗がある。一箇年に一科目づゝ合格して行くのは、さうむづかしいこととも思はれたかつたので、文科關係のものを全部片づけてしまはふかといふ愚かな考へを抱いたこともあつた。併し、私は、自然に試驗から遠ざかつてしまつた。それは、試驗を受ける根氣が盡きたといふわけでもなかつた。此の上、試驗を受けたところで、何にもならないといふことを悟つたからである。文檢を受けて居た頃、私は、法律や經濟學に若干の興味をもつて居たので、先輩の二三から、文官試驗や辯護士の試驗を受けることをしきりにすゝめられた。文官試驗や辯護士の試驗は、さうむづかしいものとは思はれなかつた。二年もかゝれば、みな受け終ることが出來るといふ氣もした。併し、文官試驗に合格しても、到底官吏の生活は勤まりさうになし、辯護士になつたとて、あゝした面白くない仕事が出來さうにもなかつた。基礎的の知識を築き上げる點から云へば、文檢位でよいと思つたから、外の試驗は、悉く斷念してしまつた。試驗といふものと絶緣してからも、私は、別にこれといふ程の仕事をして居ない。倫理學に關係のある書物を二三公にしたのと、種々の雜誌に感想文を時々發表した位のことである。これから先には、少し位力のはいつた仕事も殘したいと思つて居るが、果して出來るか出來ないか今のところ疑問である。私のやうに怠慢では問題にならぬが、文檢のことで相談に來る人に對して、いつも、私は、前に述べたやうな試驗の利害を語り、長く試驗に釣られて居ないようにすることをすゝめる。試驗は、早く打ち切りにして、學究的の人なら、專心に學問の研究に進み、教育者として適任者であつたなら、實際教育のために獻身的の活動をするようにといふ注意を與へて居る。私は、學校生活のあまり長いことに贊成しない。現今の制度は、教育期間が長過ぎるやうに考へて居る。一日でも長く

學校教育を受けるのをよいとするやうな者もあるやうであるが、大變間違つた考へだと思ふ。學校教育を受ける期間が長過ぎるために、伸びるべき才能を伸ばす機會を失ひ、空しく老朽してしまう者も少なくない。學校教育のことは、文檢に關係はないが、試驗をあまり重大視して、人生の大半を試驗のために費やすものとよく似て居るから、引き合ひに出したまでである。

第三節　文檢修身科の範圍

試驗には秘訣といふものがあるか　こんなことを人々にたづねるのは、あまりに頭腦のよい者でない。併し、度々失敗すると、何か試驗には秘訣があるやうに思はれると見える。早く試驗に合格する者に對し、受驗の名人などといふ藤口を聞くのも、かうした頭腦のよくない人達に多い。

試驗に秘訣等のあるべき筈はない。其の學科に對して徹底した知識さへもつて居れば、いつでも自由に合格することが出來る。徹底した知識と云つても程度問題である。さう大した深い知識が必要なわけでもない。文檢は、中等學校の生徒に教授し得る程度の知識の有無を檢査するのが目的である。非常に程度の高い專門の知識を試驗するものではない。文檢の修身科の全範圍に於て、非常に程度の高い知識を要するものとしたならば、恐らく合格者は一人も無からう。試驗委員といへども合格は覺束ないことと思ふ。中等學校の生徒に教授し得る程度に於て、修身科の全範圍に亘る正確な知識を收得すること、これは左程むづかしい問題でない。これだけの準備が出來て居れば、何人でも必ず合格する。文檢の合格に秘訣などのあるべき筈はない。

先づ學科の範圍を見定めよ　試驗に合格の秘訣はないが、試驗を受けるに注意すべきことはある。此の注意事項も、自然に會得出來るものである。併し、はじめから聞いて置けば、更に一層都合がよい。二回も三回も失敗してから、漸く氣がつくやうでは、時間と勞力の上に於て損をする。受驗上の注意事項として、最も大切な問題は、先づ其の學科の範圍を見定めることである。學科の範圍をしつかりと見定めてかゝらなければ、讀書の方針が立たない。殊に、修身科のやうな學科は、學科の性質上、範圍が漠然として居る。學科の範圍を見定めることが特に必要である。

然らば、文檢の修身科は、如何なる範圍に於て試驗せられるであらうか。毎年の問題の上からこれを察すれば、文檢の修身科は、第一に倫理學概論、第二に倫理學史、第三に實踐倫理、第四に國民道德といふやうになつて居るかと思はれる。以上の中、倫理學史は、西洋・支那・日本の全體に亘つて居る。毎回、倫理學概論から一二問題、倫理學史から西洋・支那・日本各一問題、國民道德から一問題、實踐倫理から一問題づゝ出る。但し、これは年々必ず此の通りに確定して居るわけでもない。實踐倫理の問題は、多く中等學校上級生に對する教案として出る。これは、毎年殆ど同じである。

以上の如く考へて見ると、文檢の修身科は、其の範圍が極めて廣い。此の多方面に亘る知識を一通り取得することは、甚だ困難のやうであるが、實は、準備の仕方によつて、それほど困難なこととも思はれぬ。何となれば、其の範圍は、非常に廣いが、倫理學にも、倫理學史にも、國民道德及び實踐倫理にも、みな研究の要點といふものがある。其の要點を明瞭に把捉してしまへば、全體の知識が比較的速かにまとまるからである。これは、文檢の受驗者のみに限ら

ない。獨學で或る一つの學科の基礎的知識を築き上げやうとするには、其の學科の要點を先づ第一にしつかりと拉へてしまはなければならぬ。それが自分の知識の體系になる。一度び知識の體系が成りたてば、其の後は、出來るだけ多くの書を讀んでそれを培養して行くのである。さうすれば、其の知識の體系は、自然に成長してゆく。最初に基礎的の知識を築き上げることに努力しない者は、知識の體系といふものが出來て居ない。從つて、讀む書物が斷片的に散漫な印象を殘すのみに止まる。末梢的な思想文や、小器用な小品文は書けるやうになつても、正確な知識や深みのある思想は、永久に生じない。文檢には、此の要點を明瞭に把捉することが特に必要である。要點さへよく理解して居れば、殆ど失敗することはあるまいと思ふ。文檢が基礎的知識を築き上げる方便としてよいといふことは、此の點からも證言されるのである。

然らば、文檢の修身科は、倫理學・倫理學史・實踐倫理・國民道德等の各方面に亘り、如何なる點を如何に把捉すればよいか。それに就いて、少しく私の意見を述べて見たいと思ふ。

第四節　倫理學の要點

先づ第一に、倫理學といふものは、如何なる點を十分に理解すればよいか——といふことから述べて行きたい。倫理學の知識を最も概括的に論じたものは、「倫理學概論」である。故に、此の問題は、歸着する所、最も組織的に明瞭に書かれた「倫理學概論」を精讀すればよいといふことになるのである。併し、今日、出版されて居る「倫理學概論」が、何れもみな此の目的に適合したものだとは云はれない。元來、「倫理學概論」には、二種類あるやうである。其の一つは、初學者のために、倫理學上の諸問題を解明しようとするもの、他の一つは、著者が自分の信ずる學說を中心として倫理學上の諸問題を批判的に論述しようとするものである。これは、たゞ倫理學上のみならず、他の諸學問でも、「概論」と稱するものにみな當て嵌まることかとも思ふ。

元來、體系とか組織とかいふものは、根本思想によつて定まるのであるから、倫理學體系として、如何なるものが正しいかといふやうなことを速斷するわけに行かない。併し、學問としての倫理學が、如何なる事柄を中心として論ずるものであるか——は容易に斷言し得るのである。即ち、倫理學の中心たるものは、良心の問題、行爲及び品性の問題、道德理想の問題、德及び本務の問題である。其の他、以上の問題と非常に深い關係を有し、或る意味に於ては、寧ろ根本問題の觀をなして居るのは、人生觀の問題、人性論の問題、自由意志の問題等である。說き方や順序は、種々樣々になつて居るが、如何なる倫理學の內容も、以上の外に出て居ないやうである。例へば、リップスの「倫理學の根本問題」にしても、ファイトの「倫理學原論」にしても、論じて居ることはみな同じである。たゞ以上の如き題目を並べて居ないだけに過ぎない。故に、倫理學を初めて學ぶ者は、以上のやうな大綱を頭腦の中に描き、各項目には、如何なる問題が含まれて居て、それに對し、如何なる說が現はれて居るかを了解してしまはなければならぬ。例へば、良心の問題なら、良心の權威、良心の作用といふやうな大綱を思ひ浮べ、良心の權威に就いては、如何なる說が今までに出て居るか、それに對する自分の意見——といふ順序に概括して行くのである。前に列擧したやうな諸問題を一々右のやうな順序に概括して置けば、如何なる書物を讀んでも、非常によく消化してゆく。西田幾多郎

氏の「善の研究」の如きものも、杉森孝次郎氏の「倫理學」の如きものも、一々徹底的に了解し、其の長所を汲んで、自己の思想の養分とすることが出來る。然るに、世の中には、さういふ着實なことを考へないで、リップスの書物でも讀めば、內容ははつきりとわからなくても、自分の思想が進んだやうに考へる者がある。愚も亦甚だしい。殊に、リップスの書物の熱烈な文字に動かされて、局部的の例や論法などに感心してしまふ者のあるのは滑稽と云つてよい。倫理學の基礎的參考書として、「善の研究」や「倫理學の根本問題」のみを擧げて置く者が往々あるが、私は、いつもさうした人の心を推察するに苦しむ。「善の研究」や「倫理學の根本問題」は、何れもあとで讀むべき書物である。初學者の先づ第一に讀むべき書物ではない。

第五節　西洋倫理學史の要點

文檢を受けると否とを問はず、倫理學の研究者は、倫理學史に相當の重きを置く心要がある。妹に、受驗者は、西洋倫理學史をよく理解して置かなければならぬ。

西洋倫理學史を簡單ながら一と通り理解するにはかなり骨が折れる。倫理學は、もと哲學の一部として發達したものである。或る時代には、倫理學が哲學の全部であつた。倫理學の變遷を知るには、どうしても哲學の沿革から研究してかゝらなければならぬ。西洋に於ける三千餘年の哲學史の大體に通ずるには、少からぬ時間と勞力を要する。併し、それを研究するには、前に述べたやうに要點といふものがある。其の要點を把捉してしまへば、容易に哲學史の大體を會得することが出來る。如何に記憶の强い人でも、三千餘年間に出た哲學者の名を一々記憶し、其の學說を殘る隈なく譜記してしまふわけにはいかない。哲學史の專攻者ならば兎に角、文檢の受驗準備や、基礎的知識の收得に、さうした專門的の穿鑿は、全く必要のないことである。

然らば、如何にして哲學史の要點を把捉するか。哲學史の要點といふのは如何なるものであらうか。私の考へて居ることは、どの點まで正鵠を得て居るかわからないが、とにかく、私の考へて居るところを次に述べて見よう。哲學史は、通常、これを古代と中世と近世とに分けるが、此の區分によつて、其の時代の思想界を了解して行くことを最も便利と思ふ。

古代の哲學といふのは、ギリシヤ・ローマの哲學である。此の時代の哲學は、ソクラテス、プラトーン、アリストテレス、三人の學說を中心として理解すればよい。先づ古代の自然研究から、人事研究の問題に轉じて、ソフィストが現はれて來た理由を簡單に會得し、以上の三大哲學者の學說を綿密に考察した後、アリストテレス以後の時勢と諸學派の興亡、殊に、ストア學派とエピクロス學派の消長を一瞥すれば、古代の哲學の概要は、粗ぼこれを把捉することが出來る。

中世の哲學は、主としてキリスト敎の哲學である。キリスト敎義の哲學的組織と云つた方が尙ほ一層よくわかる。スコラ哲學といふものが其の中心となつて居る。スコラ哲學とは何であるか、スコラ哲學は如何にして發生し、如何にして消滅したか。これが中世の哲學を理解する主眼點である。スコラ哲學のことを知るには、其の豫備として、キリスト敎の大要と、はじめての敎義組織を試みた敎父哲學のことを會得して置く必要がある。併し、これは極めて簡

單でよい。キリスト教や教父哲學は、時代の上から云へば古代に屬して居るが、こゝで併せて研究するが便利である。またスコラ哲學の傍を流れた神祕主義とか自然研究の傾向とかいふやうなものもあるが、これも大體を知つて置くだけで十分である。

近世の哲學は、古代や中世よりも複雜である。併し、これも考へやうによつては、單純に理解して行くことが必要である。近世の大哲學者カントを中心とし、哲學思想の變遷を回顧して行けばよいのである。カントの批判哲學といふものが、如何にして發生したか。人類の思想は、突然に全然新らしく湧き出るものでない。批判哲學といふものは、勿論、カントの獨創的思想である。併し、此の批判哲學の發生に就いては、それの發生すべき思想上の背景をもつて居る。先づ其の背景を了解してかゝらなければならぬ。近世のはじめから、西洋諸國には、立脚地の異なる二個の哲學思潮が發祥した。英國のベーコンに起れる經驗論と、佛國のデカルトに起れる純理論である。經驗論は、ベーコンからホップス及びロックを經て、ヒュームに至り、其の絶頂に到達した。ヒュームは、經驗論を極度に發展せしめて、經驗論の立脚地を離れた。經驗論といふものは、結局、これを徹底的に主張することの出來ないことを示したのが、ヒュームである。デカルトに發した純理論は、スピノーザを經て、ライブニッツに傳はり、著るしく發展した。此の純理論の系統から出て、ヒュームが示した經驗論の教訓に目覺め、認識の問題を根本的に考へたのが、カントの批判哲學である。故に、經驗論と純理論の根本的特徴を明かにして置いて、經驗論者としてのベーコン、ホップス、ロック、ヒューム、純理論者としてのデカルト、スピノーザ、ライブニッツの諸說を吟味すれば、カント以前の哲學は、大體に於てこれを推知し得るのである。カント以後には、偉大な哲學者が非常に多く出た。思想も頗る複雜を極めて居る。百花の燗漫たる觀がある。併し、これとても單純に考へられぬこともない。先づカントの思想を承けた先驗主義の哲學から考へて行くのである。カントの後には、フィヒテ、シェーリング、シュライエルマッヘル、ヘーゲル、ショーペンハウエル、ヘルバルト等の哲學者が出た。これ等の諸學者の說は、どうしても明かにして置かなければならぬ。ヘーゲルの哲學は、一時、獨逸の哲學界を風靡したが、唯物論の勃興と共に衰頽した。ヘーゲルの哲學の衰頽は、先驗主義の哲學の衰頽であつた。然るに、程經てまた新らしい哲學の傾向が現はれた。其の一つは、自然科學の知識から得た唯物論と、カントの流れを汲める唯心論とを結合した新組織である。トレンデレンブルヒ、フェヒネル、ロッツェ、ハルトマン、ヴント等の人々がそれに屬する。他の一つは、カント哲學の復興である。これを新カント學派と云つて居る。コーエンを中心とするマールブルヒ學派、ウィンデルバンド及びリッカートを中心とする西南學派が、代表的の新カント學派である。また英國の新カント學派には、倫理學上に於て、特に注目すべき地位を占めて居るグリーンがある。以上の諸學者の學說を一々檢討すると、カント以後に於ける先驗主義の哲學の大勢がわかる。次にヒュームに於て絶頂に達した英國の經驗哲學の系統を一瞥する必要がある。先驗哲學が旺盛になつても、決して、經驗哲學は、滅びてしまはなかつた。常に思想界の一部を流れて居た。而かも、此の經驗哲學は、自然科學の影響を受けて、更に一層其の主張を鮮明にし、實證哲學となつて現はれた。佛蘭西の實證哲學は、コムトによつて代表せられて居るから、先づコムトの說を明かにし、其の前後を簡單に理解して置けばよい。英國の實證哲學は、功利主義の倫理となつて發達し、ベンザム、ミル、スペンサー等の代表者を出した。功利主義の變遷をこゝで精査することが必要である。また最近に至つて、經驗哲學の新傾向とも認むべきものに、プラグマティズムと新實在主義とが出た。プラグマティズムの代表者

たるジェームス、デューウィー、シラー、新實在主義の代表者たる、ムーア、ラッセル等の說も、其の要點だけは知つて置かなければならぬ。外に尙ほベルグソンやオイッケン等の如き大哲學者もあるが、以上によつて、近世倫理學史の輪廓だけは、十分に理解せられると思ふ。かくの如く考へて見れば、西洋倫理學史の大要を簡單に會得することも、さうむづかしいことではないやうである。

前にも述べたやうに、西洋の倫理學は、もと哲學として發達して來たものであるから、哲學史の大體に精通せずして、倫理學史の理解は、全然不可能であると云つてよい。哲學史を研究しながら、それと聯關して倫理思想の變遷を明かにして行くが、研究方法として最も良策である。

第六節　支那倫理學史の要點

通常、「東洋倫理學史」と稱せられて居るが、實際は、支那倫理學史である。支那倫理學史といふよりも、支那倫理思想史と云つた方が尙ほ一層よく其の內容を現はして居る。

支那の倫理思想も亦頗る複雜な變遷をして居る。古來、種々樣々の思想が現はれた。併しながら、これも考へ方によつては、極めて單純に會得することが出來る。支那の倫理思想と聞いて、先づ躊躇するやうなことは甚だ愚かである。支那は、古い國であるから、思想家や學者が非常に澤山出て居る。併し、支那思想の中心となつて居るのは、春秋時代と宋明時代である。故に、此の時代の思想さへ正確に理解すれば、支那思想の要領だけはわかる。春秋時代には、諸子百家と云つて、種々の說が現はれたが、其の中で最も注目すべき思想の系統は、儒・道・楊・墨の四家である。就中、精密に研究しなければならぬものは、儒敎と道敎との二つである。儒敎の大要を知るには、支那古代の思想を吟味して置いて、儒敎の大成者たる孔子の說を究め、更に、子思や孟子に及ぶのが順序である。孔子の說は、特に詳しく、且つ明瞭に記憶する必要がある。「四書」は、此の時に參照して讀むがよい。道敎は、老子と列子と莊子との三人の思想の大體に通ずることを要する。楊・墨は、其の提唱者たる楊子と墨子だけでよいから、比較的簡單に準備を終ることが出來る。宋明の思想は、これを了解するにやゝ困難である。宋代から元代を經て明代に至る間は、儒敎が哲學的に解釋せられた時代である。儒敎は、元來、吾人の日常生活に對して有益な指導をなす實踐道德であつたが、時勢の要求は、これに哲學的の根據を與へなければ止まなかつたのである。此の時代に擧出した學者は、非常に多くの數に亘つて居るが、二派の系統にこれを分けて見ることが出來る。其の一は、程朱學派、其の二は、陸王學派である。程朱學派の說を知るには、周濂溪・程明道・程伊川等の說を理解して置いて、朱子の說に入るが順序である。また陸王學派の方は、陸象山と王陽明だけを特に詳しく讀んで置けばよい。以上は、支那倫理思想の主眼點である。勿論、歷史として見て行くには、春秋時代から宋明時代に至る中間に出た種々の學者の思想をも研究しなければならない。併し、それ等は、以上の主眼點をはつきりさせる方便位に考へて居たら十分であらう。初學者が最初から細大漏らさず記憶しようとかゝるのは、勞して效のないことに終りやすい。以上の主眼點に徹した上、他の方面を研究するならば、それは其の研究の詳しくなる程よい。

第七節　日本倫理學史の要點

日本の倫理學史も亦倫理思想史である。日本の倫理思想史は、西洋や支那に比較して甚だ單純の感がある。日本には、獨創的の思想が極めて少なく、多くはみな外來思想の傳達に過ぎないからである。

日本の倫理思想史の中、最も力を注ぐべきところは、いふまでもなく德川時代である。德川時代以前にも、勿論、倫理思想といふものはあつた。併し、それは、まだ十分に研究が出來て居ない。將來、日本の倫理思想を研究する人々は、是非とも手を着けなければならぬ問題であるが、文檢受驗者に要求すべき性質のものでない。また明治以後にも倫理思想はある。西洋の思想がはいつてから、日本の倫理思想は、著るしく豐富になつて居る。併し、これも未だ研究されて居ない。德川時代の倫理思想も、僅かに井上博士によつて、古學派・朱子學派・陽明學派の思想が明かになり、後に二三の人々が折衷學派・考證學派・獨立學派・神道學派・心學派等を追補したに過ぎない。漸く其の一部分が研究されたのみである。日本の倫理思想は、まだ研究の餘地が非常に多い。これ等は、今後特殊の研究者が出て解決すべき問題である。文檢受驗者は、たゞ既刊の書物によつて、上古から江戸時代に至るまで思想の變遷を概括的に理解して置き、次に、江戸時代の諸學者の說の要點を知ればよいのである。朱子學者としては、藤原惺窩・林羅山・室鳩巢・中村惕齋・貝原益軒等をはじめ、水戸學派や闇齋學派等の說を簡單ながら記憶して居なければならぬ。陽明學派の中では、中江藤樹・熊澤蕃山等から、吉田松陰の說が時々試驗の問題にも出て居る。古學派の中では、山鹿學派の山鹿素行、堀河學派の伊藤仁齋、護園學派の物徂徠等の說は、詳細に讀んで置かなければならぬ。從來、筆答にも口述にも屢〻これ等の人々の學說が問題に出て居る。折衷學派や考證學派は、文檢の問題としては、あまり出ないやうであるが、日本倫理思想の基礎的知識を養ふ上から云へば、度外視されない。獨立學派では、二宮尊德・三浦梅園・帆足萬里の說の大體を理解して置くことが必要である。神道學派では、前にも擧げた山崎闇齋一派の垂加神道、本居宣長系統の古神道を知り、心學派では石田梅巖の說を見なければならぬ。以上のやうにすれば、日本倫理學史の大體に通ずるのも、さほど困難なことではなく、また餘り多くの時日を要する問題でない。

第八節　國民道德の要點

國民道德論は、今日でも、尙ほ極めて漠然として居る。國民道德の概念も、まだ判然として居ない。國民道德の名のつく書物は、非常に數多く出て居るが、かなり怪しいものである。

國民道德は、如何なる要點を把捉すればよいか。これは、誠に答へ難い問題である。私は、國民道德の體系に就いて、確立した意見もないし、また、現在、國民道德の研究に、非常な興味をもつて居るわけでもない。併し、國民道德は、次のやうな順序に理解してゆけば、いくらか組織立つた知識になるかとも思はれる。先づ第一には、「國民道德の意義を明かにする。第二には、「國民道德の本質」を考へ、人道や實踐道德と比較する。第三には、國民道德の根據たる「國民生活の意義」を確かめる。これだけは、國民道德の序論である。國民道德の本論は、國民道德の意義

の定め方によつて異なるが、國民の守るべき道德を國民道德といふものとすれば、實踐倫理上の德目を秩序的に排列したものを擧げなければならぬ。「教育に關する勅語」がそれに該るかとも思ふ。故に、國民道德の本論は、專ら「教育に關する勅語」の研究になるのであるが、先づ、第一には、これを沿革的に考へて行かなければならぬ。卽ち、「國民道德の發展」を考へ、外來思想と國民道德との關係を明かにする必要がある。第二には、國民道德が發展して來た中途に於て現れた特殊の形式、「神道」及び「武士道」の由來と變遷を知らなければならぬ。第三に、「國民道德の大本たる教育勅語の德目」に及び、第四に、「國民道德の特色」卽ち、忠孝一本とか、忠君愛國の一致とか、祖先崇拜とかいふ問題に入り、第五に、かゝる「國民道德の特色を生ずる國情」卽ち、國民の境遇・國民性・國體・家族制度等を精査し、第六に、國民道德の將來を考へるのが自然の順序であらう。以上の如く順序を立てゝ考へると、斷片的な國民道德論が少しまとまつて來る。私は、嘗て、文檢を受ける當時に、右のやうな順序に國民道德論を組織して記憶した。それを書き下したのが、大同館から出版した所の「國民道德要領講義」である。此の書は、後年になつてから、また新に出たが、文檢當時に出來た稿本に基づくもので、私にとつては、最も思ひ出の深い著作の一つである。極めてありふれたことしか書いてないが、初學者にとつて最も親切な書物で、また國民道德をこれまでに組織立てたものは、外にないことを、私は、何人にも公言し得る。

第九節　實踐倫理の要點

實踐倫理の問題は、いつも教案の形式になつて出る。例へば、「社會的正義に就いて教案を作れ。」とか、「社會奉仕に就いて教案を作れ。」とかいふやうな問題になつて居る。故に、實踐倫理の研究は、中等學校の修身教科書によらなければならぬやうになるのである。文檢受驗の參考書は、非常に多く出て居るが、教案の形式で出る實踐倫理の參考書は、今まで一つもなかつた。

實踐倫理は、既に小學校の當時から聞き馴れて居るから、これと云つて注意することもないが、文檢の實踐倫理は、前にも述べたやうに、教案の形式で出るから、現行中等學校の修身教科書を一讀して、各學年の程度や其の內容の大體を會得しなければならぬ。教案の問題は、毎年、豫備試驗にも本試驗にも必ず一問題づゝ出る。故に、教案を輕視するといふことは、最も注意の足りない受驗法と云つてもよい。

現行の中等學校に於ける修身教科書といふものは、「中學校教授要目」「高等女學校教授要目」「師範學校教授要目」によつて、其の內容及び程度を定められて居る。故に、文檢の實踐倫理の要點としては、先づ其の教授要目なるものから考へて行かなければならぬ。（教授要目の內容其の他は、省略する。）

第十節　結論

以上の如く、文檢修身科の全範圍に亙る要點を擧げて見れば、文檢の準備といふもののさうむつかしくないことがわかるであらう。かういふ要點を知らず、どの參考書に就けばよいかといふことをも考へずに、難解不得要領な書物

を片端から全部讀破しようとして居る人も甚だ多いやうである。誠に氣の毒の感に堪へない。それは、たゞ文檢に失敗するばかりでなく、基礎的知識の成立といふ上に、非常な損をする。五年も六年も試驗に失敗したり、いつも煮えきらない意見を吐いて居るやうな人には、さうした讀書家が多い。

私は、文檢の豫備試驗を七八回も受けたといふ者を數人知つてゐる。それ等の人々は、努力が足りないのかと云ふと、決してさうでない。かなり熱心に讀書もして居る。頭腦も惡くはない。それだのに、試驗にはいつも失敗する。試驗には、勿論、運・不運といふこともあるが、相當に準備して受驗し、七八回も失敗すると云ふには、何か理由がなければならぬ。運とか不運とか云ふ言葉で、簡單にすましてしまふべきものでない。要するに、さうした人たちは、文檢の性質を知らず、其の學科の範圍や研究の要點がよくわかつて居ないからであらう。私は、これまでさういふ人から質問される度毎に、前のやうな返答をして來た。これから受驗しようとする者にも、多少の參考にならうかと思つて、これを公表した次第である。

最後に、また繰り返して置く。文檢は、獨學者が基礎的知識を築き上げる方便としてのみ有益である。基礎的知識は、なるべく早く正確に築き上げるのがよい。さうして、築き上げた知識を深めることに全力を注がなければならぬ。人間は、いつまでも生きて居るわけに行かない。同じところに長く足踏をして居るのは、人生の旅程を縮めてしまふことを忘れてはならない。

第三章　文檢修身科の參考書と其の讀み方

第一節　緒言

文檢の修身科に應ずる人々は、如何なる書物を、如何に讀めばよいか——といふ質問であるが、かういふ質問をこれまでに、私は、度々受けて居る。此の書物はよいとか、あの書物はよくないとか云ふやうに、現在出て居る著書に對して、具體的な批評をすることは、私の立場として出來ない。併し、今日、雜誌に出てゐる受驗記や、單行本として出版されて居る受驗案内書を見ると、かなり無責任なものがある。例へば、現在ではもうどこを探してもないやうな絶版の書物を並べたり、徒らに官僚式な肩書のある學者（眞の學者か否かは疑はしい）の著書のみを擧げたりしたものが多い。それでは、さうした書物が、何れもみた非常に優れた名著かといふに、内容は、全然これを裏切つて居るから滑稽である。つまり、其の書物の内容も何も見ないで、出鱈目に書名を列記するのであるから、初學者に對して、不親切の極みと云はなければならぬ。中に、最もひどいのは、自分の所で出版した書物のみを擧げて、故意に、他の書物を逸して居るのがある。かくの如き受驗案内書は、書店の引札に過ぎない。而かも、かゝる卑劣な出版業者の根性を知らぬ地方の受驗者は、これによつて書物の選擇をしようとする。溺れんとする者が、一木の藁に縋るやう

に、多くの受驗者は、受驗記とか受驗案内書とか云へば、それが如何なる動機で如如なる人々の手に成れるものであるかも考へず、血眼になつて讀み、只管それに賴らうとする弱點を有して居る。受驗者がかうした弱點をもつことを咎めるのは酷である。かうした受驗者の弱點を利用して、自家の出版廣告をする者の方を責めなければならない。これも何書店出版の何といふ書物と指摘することを憚るが、兎に角、現在出て居る受驗案内書に、無責任なものの多いといふことだけは明言して置く。尤も、これは、修身科のみに就いていふのである。他の學科のことは知らない。受驗記は、みな合格者が書くものである。併し、合格者の書いた受驗記とても、悉く信用は出來ない。文檢の合格者は、實力にかなり甚だしい相違がある。非常に優れた者もあれば、あれがどうして合格したと思ふ程の者もある。殊に、最近文檢の合格者が前よりも多くなつた。試驗の程度が低くなつたかどうか知らないが、前よりも容易に合格の出來るやうになつたのは事實であるらしい。實力の非常に劣る合格者の受驗記は、却つて受驗者を害することがある。實力の劣る合格者でも、正直に書いた受驗記なら、また、そこに貴い所があつて、參考にもなる。併し、さうした合格者に限つて、必ず一種の虚榮心をもつて居る。誇大に自己を吹聽したがる。讀みもしない書物を並べて、如何にも勉强家らしく裝ふ。實に愚かな話である。私は、時々雜誌に出て來る受驗記を讀んで見るが、其の中に、參考書の書名や著者の名の違つたものを見受ける。それが一寸した書き誤まりではなく、如何にも讀んで居ない書物を列擧したのだと思はせるものがある。また列擧してある參考書を一瞥しただけでも、實に頭腦の惡い合格者だといふ直覺を與へる受驗記が少なくない。かういふ種類の受驗記に賴つて、受驗の準備をはじめる人は、其の出發點に於て、既に大變な損をして居る。氣の毒なことだと思ふ。

今日の受驗記や、受驗案内書に信用の置けないものが多いといふことを知つて居るから、私は、こゝに、問はれるにまかせ、文檢修身科の參考書と其の讀み方に就いて、自分の意見を正直に述べたいと思ふ。私自身が、今日參考書の選擇等に關する意見を述べるのは、遠慮しなければならぬことかとも考へられる。併し、私も、嘗て、文檢のためには、苦しい道を歩いた者である。同じ道を歩く人々のためには、自分の力相應の奉仕をしなければならぬ。私のいふことが多少修身科受驗者に便益を與へるならば、こゝに數時間を費やして、此の問題を語るのを厭はないのである。また修身科の受驗者中には、私の著書を參考とせられる者が甚だ多いといふことも耳にして居るから、自分の著作目的や其の内容をも併せて述べ、これを讀む人々の誤解を招かないやうにして置きたいと思ふ。

從來、度々述べたことでもあるが、文檢の修身科は、倫理學・倫理學史（西洋・支那・日本）・國民道德・實踐倫理の範圍から問題が出るから、以下此の順序によつて參考書を擧げる。

第二節　倫理學の參考書と其の讀み方

書物の數は、非常に多いのであるが、書名を擧げようと思ふと、適當な書物の甚だ少ないことを感ずる。倫理學の參考書の如きは、殊に其の感が深い。倫理學の全體を系統的に述べた書物、即ち「倫理學概論」の中で、文檢受驗者の參考になりさうなものを擧げて見ると、僅かに左の數種しかない。

教育的倫理學講義　中島力造氏著

倫理學演義　吉田靜致氏著
倫理學講義　桑木嚴翼氏著
倫理學　大西祝氏著
倫理學原理　土屋幸正氏著
倫理學概論　萩原擴氏著
倫理學概論　大島正德氏著

以上の外に、最近、新進の倫理學者によつて成れるものが三四種ある。併し、私は、それ等の著書をまだ精讀して居ないからこゝには擧げなかつた。また倫理學といふ名で出て居ても、初學者に概論的知識を與へるといふ特色をもたないものは省いた。其の題名にも云へるが如く、こゝに述べるのは、專ら文檢受驗者本位の書物の選擇である。倫理學上から見て、優れた研究であるか否かの問題ではない。中には、勿論、文檢受驗の初學者のためにも良書であり、而して倫理學書としての名著もある。併し、初學者に不適當な書物、必ずしも學術上の價値が劣つて居るといふことはない。

以上のやうに、書名を列擧てし見ると、どの書物から讀みはじめたらよからうかといふやうな疑問が起るに相違ない。それに就いて、私は、かう考へて居る。私は、かつて文檢修身科受驗者のために、研究の要點といふものを述べたことがある。それをもう一度反覆するならば、今日の倫理學といふものの中心問題を、正確に、明瞭に、早く會得することである。而して、今日の倫理學の中心となつて居るのは、良心の問題、行爲及び品性の問題、道德理想の問題卽ち道德的判斷の標準問題、本務及び德の問題、外に、これ等の問題と密接な關係をもつて居る人生觀の問題、人性論の問題、自由意志の問題等である。倫理學の原理を論じた書物の中には、非常に變つた順序のものもあるが、歸する所、みな以上の如き問題を論じて居るに過ぎない。故に、初めて倫理學を學ぶ人々は、第一に、以上の諸問題の大要を了解する必要がある。それには、以上の諸問題を正確に明瞭に叙述したものがよい。

そこで、私は、前に擧げた著書の中で、荻原氏の「倫理學概論」を人に奬めて居る。私は、勿論、荻原氏の著書を全然是認しない。併し、今日まで出た此の種の書物の中では、最もよくまとまつて居るし、また、最も明瞭に叙述してある。此の書は、著書が自ら執筆したものであるといふことも、安心して讀める理由の一つと思ふ。今日の倫理や教育關係の書物には、講演の筆記があまり多過ぎる。人によつては、文字を以て發表する才能のない者もあり、また、多忙な爲めに書く暇のない者もある。故に、講演の筆記必ずしも排斥すべきものではない。併しながら、講演の筆記といふものは、概して字句が粗雜であり、冗漫な挿話などが多い。學問や文藝に關するものは、これを表現する文字にも、細かい所まで注意が行き屆いて居なければならぬものである。然るに、講演となれば、自ら其の聽衆の如何を顧慮するやうになる。所謂、人を見て法を說くことになるのである。元來、話といふものは、時間的の繼續に追はれたり、抑揚に支配せられたりして、思はぬ修飾が加はり易い。餘程洗煉せられた話をする人でも、冗漫な言葉がかなり多く加はつて居る。眞に無駄のない話といふものは、芝居のセリフより外にないのである。況んや、講演の如き人を見て法を說くものは、表現の言葉が洗煉せられて居ないばかりでなく、時々鳴物入りの氣焰などが入る。それで、私は、講演の筆記といふものに、非常な不滿を感じて居る。讀むことはあるが、精讀する氣になれないのであ

る。從つて、他人にも、精讀する書物としては、其の人が直接筆を執つて書いたものを奬める。尤も、講演の筆記にも其の種類がある。原稿を正確につくり、それに基づいて講演し、筆記になつてから、また嚴密な訂正をしたものもある。夏目漱石氏の「文學論」の如きも講義の筆記であるが、其の訂正の嚴密なことは、「漱石全集」に出て居る一葉の原稿を見てもわかる。。嚴密に訂正した筆記なれば、或る程度まで安心して讀めるが、それとても、講演は講演だけのものである。況んや、不用意に駄辯を弄し、殆ど校閲もしないやうなものに至つては、沙汰の限りである。また講演の筆記にあらざる著書の中にも、種々の差別がある。地方の眞摯な讀者が聞いたら必ず驚くであらと思はれるのは、著書の代作である。私たちは、田舍に居る時に、小栗風葉の代作といふ問題を、當時の文學雜誌で見て、驚いたことがあつた。併し、代作は、小說ばかりでもなく、小栗風葉ばかりでもなかつた。著作の世界に、餘り代作といふこの多いのを不思議な眼で見て居る。勿論、これは、一般的な話であつて、敎育や修身關係の書物に代作が多いといふわけでない。如何に著者が執筆したやうに見える書物でも、代作は例外である。其の人の實力如何に拘はらず、著者自らが、少なくも自己の著作を愛する精神をもつて書いたものでなければ、尊敬して讀む氣になれない。餘談が長くなり過ぎたが、以上の如き理由を考慮して、中心として讀む書物を選定したいと思つて居る。倫理學の書物を選定するに當つても、此の考へが私の頭腦から離れないのである。

荻原氏の「倫理學概論」は、よくわかる書物であるが、倫理學といふものに、全く豫備知識がなく、それでもまたわかり惡いといふなれば、其の前に一冊だけ、尙ほ一層平易な講義風の書物を讀むがよい。中島力造氏の「敎育的倫理學講義」は、從來、さうした人々に最もよく讀まれて居る書物である。これは、中等學校の上級の修身敎科書を中心にした講義だから非常によくわかる。中島博士の著書は、概してみな平易である。併し、文辭は甚だしく粗雜である。讀んで居て不愉快を感ずることが少なくない。私は、かういふ粗雜な文辭で、果して思想の表現が出來るであらうか——と時々疑ふ。尙ほついでに云つて置くが、吉田熊次氏の著書にも、「敎育的倫理學」といふのがある。併し、これは、中島博士の著書と其く性質の異なるものである。こゝに云ふ意味の「倫理學概論」ではない。

大島正德氏の「倫理學概論」も、初めて讀むにはわかりよい書物である。これ等の書物を一種讀んで置いて、荻原氏の「倫理學概論」を精讀すれば、それで、先づ一と通り倫理學の知識は出來ることと思ふ。併し、一二種の著書を見たのみでは、ともすると、或る問題を忘れたり、疑問を解くことが出來なかつたりする。故に、他の書物を參照するがよい。參照する書物は、なるべく多いのを可とする。以上の諸書の外に、飜譯書では、

倫理學原論（ファイト原著）　大島直治氏譯
倫理學（ミュイアヘッド原著）　桑木嚴翼氏補譯

等がよい。ミュイアヘッドの著書は、最近に市川一郎氏の譯が出て居る。これは、新らしい版によつたものであるから、これによる方がよからう。私がこゝに參照といふのは、參考のために、必要なところだけを讀むといふ意味である。一々全部を精讀するといふのではない。中には、倫理學概論だけを七冊も八冊も全部通讀する者がある。それは、誠に効力のない讀書法である。其の中の一冊を精讀すれば、大同小異の他の類書を通讀するには及ばない。時間と勞力とを亂費するのは、獨學者の最も誡めねばならぬことである。又、中には、一冊を選擇して精讀せず、あれもこれもと片端から讀みかじる人もある。尙ほ更に無意義な讀書法である。かうした讀書法の勞して效なきことは、獨

學者の自然に悟る所であるが、豫め注意してかゝれば、それに越した妙案はない。讀むべき書物は無限にある。一冊でも一頁でも、多く讀むことを可とはしない。讀んだものを消化して、自分の知識の體系を成長せしめて行くことをよしとする。有效な讀書法は、敢て試驗に合格する最良の策であるのみならず、修養上から考へて見ても肝要なことに屬する。一冊の中心書を精讀し、自分の疑問を解決するために、なるべく廣く他の書を參照してゆくがよい。殊に、受驗者にとつて必要なことは、試驗委員の著書を見て置くことである。元來、試驗委員の著書の中に適當なものがあれば、それを中心の精讀書とするのが最も便利である。併し、倫理學概論の中には、それに都合のよいものがない。吉田靜致氏の「倫理學演義」の如きは、分量があまりにあり過ぎる。而して、講演の筆記に通有の冗文が多い。中心の精讀書には不適當である。併し、此の書を參照することを忘れてはならぬ。尙ほ附記して置く。吉田靜致氏には、外に、「倫理學講義」と「倫理學要義」の類書が二種ある。これは、最も新らしい「倫理學演義」を讀むだけでよい。

以上の如き書物を以上の如き方法で讀み、倫理學の輪廓といふものがはつきりわかつた後には、少し高級な諸說を吟味して行くがよい。例へば

善の研究	西田幾多郎氏著
主觀道德學要旨	藤井健治郎氏著
道德の根本義	吉田靜致氏著
倫理學	杉森孝次郎氏著

等の書物は、此の時に讀むのである。飜譯書では、リップスの「倫理學の根本問題」などを見なければならぬ。これ等の書物に對しては、單に其の說を理解するといふばかりでなく、批判的に讀破することが必要である。私は、これまでに屢〻倫理學の參考書として、西田博士の著書や、リップスの譯書のみを列擧したのを見た。これ等の人から見れば、さうした著書のみを擧げて置くのが、如何にも自己の知識の程度の高いことを示すやうに思はれるのかも知れない。併し、私には、さうした人間が却つて非常に不見識に見える。また初學者には此の上もない不親切であるかと思はれる。

倫理學の概念が明かになり、中心問題の要點が會得されたら、倫理學史を一讀するがよい。而して、倫理學史を一讀した後には、倫理學史上に現はれた諸說を、倫理學概論と聯關せしめて見る必要がある。さうすると、倫理學に關する知識が尙ほ一層正確になる。例へば、道德理想論に於て、人格說といふのがあれば、古今東西の人格說を思ひ浮べ、相互にこれを比較するのである。つまり倫理學史によつて得た知識を、倫理學の體系によつて整理するのである。東西の學說を中心として、倫理學の體系を明かにしようと試みたものは、大西博士の「倫理學」である。惜しいことに、この書は未完結のまゝに終つて居る。併し、非常に特色のあるよい書物である。學說の批評の如きは、大西博士でなければ出來ない鋭さが所々に閃いて居る。

學說を倫理學の體系によつて彙類し、相互に比較し得るやうに書いたものの必要を痛切に感じた私は、先年、太陽堂から「倫理學說大系」といふものを公刊した。此の書に於て、私は、倫理學の全部に亘つて、諸說を比較對照することを得なかつた。併し、倫理學上に於て、最も中樞的地位を占める道德の理想論に關する諸說を、かなり明瞭に

詳しく說いた。例へば、自利說（個人的快樂說）と云へば、先づ自利說の根據、自利說の沿革、自利說の種類等を述べ、次に、ソフィストの自利說、デーモクリトスの自利說、アリスチッポスの自利說、エピクロスの自利說、ホッブスの自利說、佛國啓蒙時代の自利說、ニーチェの自利說、楊子の自利說といふやうな順序に、代表的な自利說を悉く紹介し、最後に自利說の概括的批評を試みて置いた。かうした要領を以て、他の權力說・直覺說・形式說・功利說・人格說等を悉く論じたから、倫理學の研究者、特に、文檢受驗者等が、倫理學と倫理學史とに通じた後、一讀して多少の利益あるものと私自身には思つて居る。外にもつとよい書物があればよいのであるが、現在では一冊もない。

私も其の中に「倫理學概論」を書きたいと思つて居るが、此の「倫理學說大系」は、其の中の一部を特に詳しく述べたやうなものである。

第三節　西洋倫理學史の參考書と其の讀み方

明治の初年からの文獻を悉く擧げて見れば、西洋倫理學史の參考書もかなり出て來る。併し、既に絕版になつたものもあり、またあまり價値のないものなどもあり、現に多くの人々に讀まれて居る西洋倫理學史といふものは甚だ少ない。左に其の二三を擧げて見れば、

倫理學說十回講義　中島力造氏著
西洋倫理學史講義　吉田靜致氏著
倫理學史綱　北澤定吉氏著
歐洲倫理思想史　綱島榮一郎氏著
西洋倫理學史　市川一郎氏著
西洋倫理學史　三浦藤作著

位なものであらうかと思ふ。（本稿執筆以後に出たものも二三ある。）

右の中、吉田靜致氏の著書は、絕版になつて居る。古本屋で探せば求めることは出來る。尨大な書物であるが、文辭が極めて冗長であり、且つ意味の徹底しない點もかなりある。試驗委員の著書であるから、手にはいるならば、參照する必要はあるが、中心として讀む著書ではない。强いて探す程の必要もあるまい。

綱島榮一郎氏には、外に、「西洋倫理學史」と命名せるものもある。共に「梁川全集」の中にある。學說が著者の頭腦を通して、かなりよく消化されて居る。且つ綱島氏一流の名文で綴られて居る。併し、はじめて讀む人には、適當な參考書かどうか疑問である。

北澤定吉氏の「倫理學史綱」は、內容の豐富な點を長所として居る。併し、初學者にはむつかしい。何等の豫備知識もなく、突然これを讀んでは、印象に殘るもの殆んど皆無であらう。

かく考へて來ると、初學者の參考書としては、中島博士の「倫理學說十回講義」を擧げなければならぬことになるが、此の書は、例の講演の筆記であつて、他の講演筆記の例に洩れず、書き方は冗漫、而かも、最近の倫理學說は、全く記述してない。故に、此の書物だけで、倫理學史の全體を知ることは出來ないのである。かく考へて見ると、西

洋倫理學史に良參考書のないことが痛切に思はれる。

此の西洋倫理學史に就いて、私の最も不滿に思つたのは、從來の倫理學史が哲學思想の概要を明瞭に紹介して居ないことである。勿論、倫理學史と哲學史とは同じものではない。倫理學史と云ふ以上、哲學史と全然區別せらるべきものであらう。併し、西洋の倫理學は、古來、哲學として發達した。最近になつてはじめて獨立した學問と認められるやうになつた。併し、現在でも倫理學は哲學と非常に密接な關係を有して居る。或る者は、全くこれを哲學體系の一部として說いて居る。倫理學の歷史は、哲學の歷史と分離することが出來ないのである。故に、倫理思想の變遷を述べるには、どうしても、哲學全體のことを概括的に略說して行かなければならないのである。それは、嚴密な意味から考へて、倫理學史の性質に反して居るかもわからない。併し、さうした書き方をした倫理學史でなければ、初學者に倫理思想の變遷を傳へることが出來ないのである。故に、從來、倫理思想を歷史的に知らうとするには、倫理學史と名のついて居る書物を讀むよりも、波多野精一氏の「西洋哲學史要」や、大西祝氏の「西洋哲學史」を讀み、其の中から、倫理思想を拔き出して行つた方がよかつたのである。中島博士の「倫理學說十回講義」の如きは、平易に述べてあつて、誠によくわかる書物であるから、初めて倫理學史を讀む者に、甚だ都合のよい點もあるが、極めて粗雜な講演である。これだけで、倫理思想の變遷を理解することは到底出來ない。或る受驗者は、西洋倫理學史の參考書として、中島氏の著書を一冊と外に何か一冊擧げて居た。かういふ受驗記を信ずる者があつたら、氣の毒なことである。

今日まで出て居る西洋倫理學史は、哲學史を併せて讀まなければならないものばかりであつた。初學者は、いつも先づ西洋倫理學史の研究に惱まされたものである。哲學史を併せて讀まなくても、倫理思想の變遷の明かになるやうな書物がなければ甚だ不便であるから、私は、先年、中興館から、「西洋倫理學史」を出版した。此の書は、哲學史の順序によつて、倫理思想の變遷を述べて行つたものである。倫理思想を中心とした哲學史と云つてもよい。倫理思想は、哲學思想の一部として發達したものであるから、哲學思想と倫理思想とを分けて述べることは、不自然でもあり、且つ不可能でもある。併し、私は、此の書物に於て、なるべく哲學思想の中から倫理思想だけを離し、はじめに哲學思想の大要を述べて置いて、次に倫理思想を述べるといふ順序に進んだ。例へば、アリストテレスのことを述べるには、先づ最初に略傳と著書の說明を揭げ、次に學說の體系を明かにして置いて、其の體系に從つて、哲學說の大要に入り、論理學說・形而上學說・宇宙說・生理說・心理說等を述べ、最後に倫理說を詳しく紹介し、政治論や藝術論の如き、倫理說に關係の深い諸方面にも及び、またプラートンの說との比較をも試みた。學者の說は、殆んどみな以上のやうな順序に述べてあるから、此の書物によれば、他の哲學史を座右に備へ、併せて讀まなくとも、粗ほ倫理思想の變遷を明かにすることが出來るものと私は信じて居る。また著作の主眼が、哲學史の系統によつて倫理思想の發達を叙述するといふ點にあつたから、倫理思想に全然關係のないこと、例へば、自然哲學の趨勢の如きものも、哲學史上に重きをなして居る事柄は、簡單にこれを叙述して行つた。

此の書には、最近の倫理思想が述べてない。これを補ふために、私は、文化書房から、「輓近倫理學說研究」といふものを出版した。最近の倫理思想を述べたものには、中島博士の著書もあり、又雜誌等に時々諸家の紹介が出るやうであるが、初學者に適當なまとまつた書物がないから、やゝ明瞭にこれを述べて見たものである。私の著書の如き

は、不完全極まるものであるが、初學者の爲めに親切を旨とし、出來るだけの注意がしてあるといふことだけは明言することが出來る。

尙ほついでながら、「西洋倫理學史」は、出版後三年もたゝぬうちに二回も火災の厄を蒙つた。其の度に紙型を燒いてしまつて版が全然變はつて居る。第二回目の厄は、大正十二年の大震火災である。此の震火災によつて、東京市內の印刷所は、大半烏有に歸してしまつた。私の「西洋倫理學史」は、非常に需要があつたが、組版にかゝる印刷所がない。やむを得ず、朝鮮の印刷所で組版をすることになつた。それがために、私は、校正を先方に一任した爲め、誤植が甚だ多い。全然意味の違つて居る所も一二箇所ある。舊版の讀者に注意して置く。

第四節　支那倫理學史の參考書と其の讀み方

支那倫理學史と名のついて居るものはないやうである。東洋哲學史と云ひ、支那哲學史と云つて居る。併し、內容は、みな主として支那の倫理思想を述べたものである。これも書物の數があまり多くない。左に其の中の二三を列擧して見ると、

支那哲學史講話　宇野哲人氏著
支那思想發達史　遠藤隆吉氏著
支那哲學史　高瀨武次郎氏著
春秋倫理思想史　綱島榮一郎氏著
支那哲學史概論　渡邊秀方氏著
東洋倫理學史　三浦藤作著

其の他に、岩橋遵成氏著「東洋倫理思想概論」の如く、歷史といふ名を冠せずして、內容の歷史に近いものもある。以上の數書の中、初學者に最もよいのは、宇野博士の「支那哲學史講話」である。此の書は、書き方が非常に簡潔で、內容もよく精選せられて居る。さうして、著者の獨得の研究も加はり、また見識も現はれて居る。支那の思想は、甚だ了解し難いものであるが、此の書を二三回讀めば、如何なる初學者でも、はつきりとしたものが腦裡に殘る。初學者のみではない、支那哲學史の專攻者も必讀する價値のあるものと思ふ。とにかく、宇野博士が頭腦のよい學者であることを思はせる良書である。

高瀨博士や遠藤博士は、何れも支那思想研究者としての權威である。其の著書が種々の點に於て優れて居ることはいふまでもない。併し、高瀨博士の「支那哲學史」も、遠藤博士の「支那思想發達史」も著るしく難解な書物である。初めて讀む人々の爲めには、甚だ不適當なものと思ふ。初學者がかういふ書物から讀みはじめることは、學修上非常な損失であるのみならず、支那思想研究上の興味を消耗せしむる虞れがある。先づ宇野博士の書物を讀んで、其の後にこれ等の諸書を參照し、更に一段と知識を深めるがよからう。原文も澤山はいつて居るから、參照するには、非常によい書物である。

綱島榮一郎氏の「春秋倫理思想史」は、綱島氏特有の見方が加はつて居て頗る面白い點もあるが、書名の示せる如

く、春秋時代しかない。渡邊秀方氏の著書は、大變によいといふ評判もあるが、まだ見ないから何とも云へない。

支那の倫理思想を研究するには、春秋時代と宋明時代とを、特に詳しく知らなければならぬ。殊に孔子や孟子に就いては、徹底的の知識をもつことが必要である。四書だけは特に精讀しなければならぬ。哲學史に現はれた孔子や子思や孟子の思想を十分に理解したあとで、必ず四書を繙くやうにしたい。

私の書いた「東洋倫理學史」は、「西洋倫理學史」と同じ目的で、同じ順序に、支那の倫理思想を叙述したものである。私の特殊な研究ではなく、從來の諸書や、または原本の一部を參照して、最も明瞭に倫理思想の發達を述べて見たまでのものである。併し、叙述の方法や順序に綿密な注意がしてあつて、はじめて支那の倫理思想を知らうとする人々にとり、最も便利な書物であることだけは何人にも公言する。「西洋倫理學史」と同じやうに一般の哲學說と倫理學說とを分けるやうにして述べたので、倫理思想を研究しようとする者には、特別に都合のよい書物であらうと思ふ。

私の「東洋倫理學史」は、大正十二年九月一日の發行である。大正十二年九月一日、それは、永久に記憶から消えない大震火災の當日である。書物は其の發行の日より三日ばかり早く出來たので、地方の書店へ送り出したものだけは燒失を免れた。併し、東京にあつたものは、書物も紙型も全部烏有に歸してしまつた。僅かに私の手許に二冊殘つたのみである。「西洋倫理學史」や「日本倫理學史」を讀んだ人々の中で、右の書を問合はせられる者が非常に多かつたが、一時は古本居の店頭にさへも影を潜めた。其の後、新に版を組み直して出版した。

第五節　日本倫理學史の參考書と其の讀み方

日本の倫理思想が今日のやうにやゝ組織だつたのは、井上哲次郎氏の努力によるところが多大である。此の點に於て、何人も井上博士の功勞を思はなければならない。故に、日本の倫理思想を研究する者は、どうしても井上博士の所謂三派哲學即ち

日本古學派の哲學
日本陽明學派の哲學
日本朱子學派の哲學

を讀まなければならぬ。併し、日本倫理思想研究の參考書として、井上博士の三書のみを擧げて置くやうなことは、初學者に對して不親切な極みである。其の理由を擧げて見れば、第一、井上博士の三書は、初めて讀む者に詳し過ぎる。原文が多く引用されて居るから、少し知識が進んでから、參照するには非常によい。併し、初めて讀むには、早く大要を把捉することが出來ない。第二、日本の倫理思想は、江戸時代の三派哲學のみではない。三派哲學は、日本の倫理倫想の一部である。初學者は、全體の思想を明かに知ることを必要とする。一局部を詳しく知ることは、學修上の第二段階に屬する。尤も、今日では、まだ日本の倫理思想の全體が明かになつて居ない。全體を知るといつても、それは、程度の問題である。此の事は別に詳しく論ずることにしたい。

これまでに研究せられた範圍内で、日本の倫理思想の一班を理解するには他の書物を讀まなければならぬ。現在、日本倫理思想の變遷を述べたものには、

日本倫理史　有馬祐政氏著
大日本倫理思想發達史　岩橋遵成氏著
日本倫理思想の系統　補永茂助氏著
日本倫理史稿　湯本武比古・石川岩吉氏著
日本倫理學史　三浦藤作著

等がある。まだ外にもあるが、主要な著書は、大體以上に盡きて居る。

有馬祐政氏の著書は、井上博士の三派哲學を簡單にして、更に外の系統の思想を若干補つたやうなものである。從來、受驗者のために最も多く讀まれた。今日でも受驗記等の中に此の書と前に擧げた井上博士の三派哲學のみを擧げて居るものが少なくない。併し、有馬氏の著書は、今日から見れば、初學者の參考書として、さう優れたものと思はれぬ。これは、著者自身も同感であらうと考へる。加之、有馬氏の著書の中には、全然叙述を缺いて居る學派もある。故に、井上博士の三書と、有馬氏の著書とで、日本倫理思想の大要を知ることは出來ない。

岩橋遵成氏の「大日本倫理思想發達史」は、浩翰な大著述である。井上博士の三派哲學以外の諸學派をも網羅して居る。原文等も多く引用してあるから、參照して讀むにはよい書物である。併し、初學者には詳し過ぎるし、またあまりよくまとまつて居ないといふ缺點がある。

補永茂助氏の「日本倫理思想の系統」は、簡單にしてよくまとまつて居る。また叙述も甚だ要を得て居る。されど、其の書名の示せる如く、本書は、歴史として、倫理思想の全體を述べたものではない。故に、歴史として見れば、本書に漏れて居る點もかなりあるやうに思はれる。

湯本・石川兩氏の「日本倫理史稿」は古い本である。古本屋を探さなければ手に入らない。これは日本の倫理を歴史的に述べた點に於て、慥かに特色のある書物であるが、初學者に必讀をすゝめる性質のものでもない。

以上のやうに見て來ると、初學者が日本の倫理思想を研究する良書といふものは一つもないのである。故に、若し、日本の倫理思想に就いて適確な概念を得ようとするならば、自分にノートを作るより外はない。先づ一般の歴史等によつて上古から江戸のはじめまでの思想の變遷を明かにし、次に、江戸時代に於ける學問の勃興及び各學派に屬する學者の說を明細に表はしたものを作らなければならぬことになる。三派哲學は、大體井上博士の研究によればよいが、其の外の學派を如何にするか。岩橋氏の著書や湯本・石川兩氏の著書は、勿論、參考にしなければならぬが、如何なる著書にも出て居ないものは、其の學者の原本を見るより外に道はないこととなる。さうすれば、非常に多くの時日を要する。文檢の受驗者等には出來ない話である。故に、今日では、既刊の書物を以て、日本倫理思想の全體を窺ふことが出來ない。諸書を參照して、わかるものだけを理解して置くがよからう。

私の「日本倫理學史」は、現在わかつて居る範圍の日本倫理思想を悉く網羅し、最も明解したものである。江戸時代の學派でも既刊の各書に現はれて居るものは、殆んどみなあつめてある。其の順序を云へば、先づ第一に、古代の思想を略述し、第二に、中世の思想を概說し、第三に、近世の思想を詳解した。近世卽ち江戸時代の倫理思想に就い

ては、最初に文教復興の理由を論じ、次に諸學派の勃興せる事情を說き、更に各學派の一般的特徵から、個々の學者の學說を列記した。學派は、朱子學派として、京師朱子學派、惺窩系統以外の朱子學派、海南朱子學派、大阪朱子學派、寛政以後の朱子學派、水戸學派等を述べた。これにて、朱子學派は、殆んど其の全部を盡して居る。次に、陽明學派を述べ、古學派の三系統卽ち山鹿學派・堀河學派・護園學派を詳說し、折衷學派・考證學派・獨立學派・神道學派・心學派等に亘つた。多くの書物には、餘り出て居ない獨立學派の二宮尊德なども、かなり詳しく、且つ極めて明瞭に紹介した。又各學者の思想は、前の「西洋倫理學史」及び「東洋倫理學史」に倣ひ、一般の哲學思想と倫理思想とを離して述べるようにした。

以上の如き目的を以て著作したものであるから、私の三倫理學史は、倫理學の歷史的研究として、何等の創意のある書物ではない。此のことは、私の書物を讀まれる人々に十分お斷はりして置きたい。併し、次手ながら申し添へたいのは、外の倫理學史、卽ち今日我が國の倫理學者を以て認められて居る人々の倫理學史、それも大方は何等の創見のないものである。或るものは、外國の書物を其のまゝ譯したやうなもの、或るものは、諸書に現はれて居る所を洗煉の足らぬ言葉で、俗話化したに過ぎない。私の書物は、史的研究に於て誇るべきものをもつて居らぬが、叙述の順序と內容の精選に就いて、非常な苦心をしたものである。文辭の注意に至つては、如何なる倫理學者、如何なる哲學者の書物にも、斷じて劣らないことを、私は、大なる確信を以て明言する。私は、新刊の類書が出る每に、先づそれを一讀して內容を吟味し、次に、全體の組織や文辭に注意して見る。私の書いたものより、文辭の上に於て優れたものが現はれたら、直ちに全部を書き改めやうと思つて居る。併し、今日までは、まだ一つも出ない。將來も果して出るかどうか疑問である。故に、私の書物は、初學者にとつて最も親切な案內書であり、且つ最も明瞭な知識を與へるものであることを信じて居る。從つて、かういふ書物が多くの人々の修學に多少の利益ある以上、私は、今後も時間の許す限りかうした書物の著作を續けてゆきたいと思ふ。

日本の倫理學史が大部分未開の儘に放棄されて居るのは、甚だ殘念なことである。私もこれから追々此の方面に研究の歩を進めたいと思つて居る。併し、私の如き者に、果して學問上多少の貢獻をするやうなことが出來るかどうかは甚だ疑はしい。

第六節　國民道德の參考書と其の讀み方

國民道德といふものも亦井上博士の力によつて今日のやうな所までまとまつたのである。故に、國民道德の研究者は、どうしても

國民道德概論　井上哲次郎氏著

を讀まないわけにはいかない。精讀すれば、右の書物だけでも、國民道德の概念が明かになる。併し、井上博士の「國民道德概論」も講義の速記であつて、十分に組織だつた著書ではない。叙述も非常に冗漫である。讀んで居る中はよくわかるが、あとで何も殘らない——といふやうな缺點がある。故に、多少は、他の書物を參照する必要がある。參照する書物としては、

國民道德要義　深作安文氏著
國民道德序論　亘理章三郎氏著
國民道德本論（國生論）　亘理章三郎氏著
國民道德論　藤井健治郎氏著
國民道德の教養　吉田熊次氏著

等がよい。其の他にも尙ほ二三種ある。また、受驗用の書物も五六種ある。勿論、これ等の書物は、一々隅から隅まで、讀むに及ばない。必要な所だけ參照すれば十分である。前にも度々述べた通り、書物は、數を多く讀むを以て可としない。自分の知識を成長せしめるに必要なものだけを、しつかりと捉へて行くがよいのである。倫理學の書物の中でも、國民道德の書物の如きは、特に、其の感が深い。井上博士の國民道德概論を讀めば、其の他はみな大同小異、說き方が變つて居る位のもので、內容に於てさほど變はつた點もない。たゞ、僅かに散見せる新說、例へば、亘理章三郎氏の所謂國性といふものが何であるか——といふやうなことだけを研究して行けばよい。故に、國民道德は、多くの書物を一々讀むよりも、自ら諸書を參照して一つの組織を立てゝ見る方がよい。私も、嘗てさうした方法をとつた。それがために、今日でも、國民道德の概念が非常にはつきりして居る。また、國民道德の諸問題に對して批評も出來る。私が嘗て組織立てた國民道德の稿本は、先年大同館から「國民道德要領講義」と題して出版されたものである。此の「國民道德要領講義」と粗ぼ同じ組織のもの（書き方は全然異なつてゐる）に諸家の說を引用したのが、前に中興館から出版した「國民道德大集成」である。

第七節　實踐倫理の參考書と其の讀み方

實踐倫理と命名した書物も數種出て居る。其の中の主要なものを左に擧げて見ると、

實踐倫理學　豐島要三郎氏著
實踐倫理學講義　吉田靜致氏　佐藤善次郎氏　著
實踐倫理講話　中島德藏氏著
實踐倫理要義　深作安文氏著

等がある。豐島氏の著書は、本務論の研究である。後に至つてかゝる名を附して刊行したものである。此の書は、種々の點に於て、長所を有して居る。併し、其の他の著書は、あまり特色のあるものとも思はれない。たゞ、平易に從來の諸德を解說したのみである。

文檢修身科の實踐倫理は、教案の形式になつて問題が出る。故に、試驗といふことを本位にして考へて見れば、中等學校の修身教科書二三種を見て置く方がよからう。現行中學校の修身科教科書の中、試驗に關係のある人々の著書を擧ぐれば左の通りである。

中學修身教科書　吉田靜致氏著

倫理學研究者のために

中學修身　友枝高彦氏著

新撰中學修身書　井上哲次郎氏・深作安文氏著

中等學校の「修身科教授要目」を一瞥し、これ等の修身教科書の德目を調査して置くことは、受驗者にとつて甚だ必要である。教案の問題は、毎年豫備試驗にも本試驗にも一問題づゝ出る。豫め注意して置かねばならぬ。文檢修身科の教案に關する參考書には、適當なものが、今日、一つもない。

第八節　餘論

以上に於て文檢修身科の參考書と其の讀み方に就いて、卑見を述べ盡した。勿論、これは、私だけの意見に止まるものである。異論もあることと思ふ。併し、私は、前のやうな參考書を前のやうに讀むが最も有利な方法であると信じて居る。

最後に、尙ほ少し注意して置きたいことがある。敢て修身科ばかりではないが、一の學科は他の學科と密接な關係を有して居る。此の關係に就いて大體の知識を得て置くことは、すべての點に於て最も必要である。

修身科は、種々の學科と關係して居るが、其の中でも、特に關係の深いのは、哲學である。故に、修身科の受驗者及び倫理學の初學者は、哲學の大要に通じて居らなければならぬ。哲學の大要に通ずるには、哲學概論と哲學史とを

一二冊づゝ精讀するがよい。哲學概論の參考書としては、

哲學概論　紀平正美氏著

哲學概論　桑木嚴翼氏著

哲學概論　兒玉達童氏著

等の中から、一冊を選んで精讀し、他の一二冊を參照するを可とする。哲學史の參考書としては、

西洋哲學史要　波多野精一氏著

西洋哲學史　大西祝氏著

がよいと思ふが、二書ともに最近の部がよい。故に、以上の一冊を精讀して、最近の哲學だけは、

西洋哲學史講義　高橋敬視氏著

等によつて補ふがよい。岩波書店の「哲學叢書」の中の哲學史もよいが、これは、文辭がかなり難解で、初學者にはわかりかねる。

拙著の「解明哲學概論」及び「西洋哲學小史」の二書は、從來出た類書の中で、恐らく最も明瞭にして簡潔なものであらうと思ふ。而かも、これだけで、必要な事柄は、大方網羅して居る。文檢修身科受驗者に必要な哲學の知識としては、これ位のものでよいかと思ふ。

第四章　文檢受驗當時の回顧

私が文檢修身科の試驗を受けてから、もうかれこれ十數年になる。過ぎ去つた昔のことを回顧して見ると感慨無量である。私は、修身と法制經濟とを併せて出願したので、準備のために、かなり忙しい日を暮した。其の前に教育科の試驗を受けて居たので、文檢といふものには經驗があつた。十數年も前の受驗記など、あまり參考にはなるまいと思ふ。併し、文檢受驗者の辿る道は、いつも同じことである。何かの暗示を與へることもあらうかと思つて、こゝに私は、當時の受驗記を載せることにした。此の受驗記は、私が其の當時匿名で「內外教育評論」に掲載したものである。全文を其のまゝ掲載することにした。今から讀んで見ると、文字の間に幼稚な考へが現はれて居て、何となく轉載を躊躇するやうな所もあるが、嘗てかうしたことを書いた時もあるといふ事實を消すことは出來ないから、私の主義として、此のまゝにして置かなければならぬ。私の受驗記は、非常に正直な受驗記である。其の頃も今も同じことであらうが、受驗記の中には、かなり虛勢を張つたやうなものが多い。私は、つとめて正直に書いた。それだけは今でも心地よく思つて居る。左の受驗記に出て居る感想の中には、今日も尙ほ變らないものがある。此の受驗記が、私にとつてなつかしく思はれる理由の一つは、そこに由來して居る。

第一節　私の文檢受驗

私は、二年前に教育科を受驗し、本年度に、修身科と法制及び經濟科とを併せて出願した者であるが、試驗の成績は、三科目とも豫備も本試驗も極めて不十分であつて、よくもあんな答案を書き、あんな答をしたと、甚だ汗顏の至りに堪えないことが多い。今まで多くの教育雜誌で受驗記を讀んでは、文檢出願者の中に、勉强家の甚だ多いのに敬服して居た。短日月の間に、甚だ多くの書を讀む人の根氣と精力とには驚いて居た。又、時々掲載される合格者の實際答案を見て、其の完全無缺な書きぶりに到底及ぶ可らずの感を抱いて居た。現に、今年度の修身科の答案なども二三讀んで見たが、私の試驗場で書いたものよりは、どれもこれも遙かによく書けて居るので、益々失望せざるを得ないのである。中には、參考書を眼前に開いて置いて書いても、三時間には迚も覺束なからうと思はれるのもある。故に、私等の受驗記などは何にもならない。且つ又立派な成績で合格した人のがいくらも出て居るから、私等がかゝる事を書くのは、少しく憚る所もあるけれども。私等の如く、小學校を卒業したのみで、中學教育も受けず、師範教育も受けず、甚だ不遇な地位にあつて、此の學科を受驗しようと思ふ人に、私が受驗に就いて感じたことを一寸述べて見ようと思ふのである。教育科の方は既に二年も前のことであるから、受驗の模樣などは大凡忘れてしまつたので、今囘の修身科と法制及び經濟科だけの話にして置かう。

元來、私には、修身・教育、若しくは法制・經濟などは、甚だ不向な學科であつて、私の性質には適して居ないやう

に思はれる。法制・經濟に關する本などは、左程でも無いが、修身・教育の本は、讀んでもとんと解らない。今でもさうである。私は、もと非常に文學好きで、小學校卒業當時から、「文庫」や「秀才文壇」などに投書しては喜んで居た。後には、「文章世界」や「新聲」などにも投書し、「萬朝報」の懸賞小說にも應募し、入選するのを喜んで居た。一時新派の和歌に熱中して、創作社同人となり、又同好の士と回覽雜誌を作つて見たり、樣々な事をやつた。不幸にして上級の學校に進む事の出來なかつた私は、小學校卒業後、直ちに代用教員となり、准教員・正教員と順次檢定試驗を受けなければならなかつた。其の中に上京する機會があつて、市内の某小學校へ奉職する事になつた。文學好きの私は、出京の當時、國語・漢文の試驗でもやつて見ようかと思つたが、それがふと教育科に變じて仕舞つた。理由は何も無い。教員をする上に、教育の知識がなければならぬと思つた位である。一月上京し、三月頃から教育書を讀み、八月の豫備に出て見た所が、偶然に通過した。十一月の本試驗にも亦偶然に通過した。教育科を受けた序だからと思つて、翌年修身科と法制・經濟科を併せて出願した所、法制・經濟の方は豫備だけ通過したが、本試驗で落されて虻蜂取らずに終つた。おまけに病氣になつて歸國し、滿一年、殆ど何もせずに遊んでしまつた。幸に身體の方は漸く健康を回復し得たので、今年出て來て又々兩科の試驗に出たのである。

私は、頭腦のよくない加減であらうが、直に疲勞してしまふ癖なので、多くの受驗記にあるやうに、澤山の書を精讀する根氣が續かない。僅かに二十五六分も續けて讀書すると、直に飽いてしまふ。飽いてしまへば、決してそれを我慢して勉強を續けることの出來ない性質である。且つ遊ぶことは中々好きで、花が咲けば上野へ行く。ボートレースがあれば隅田川へ出掛ける。藝術座の「カチューシャ」も見る。歌舞伎座の「助六」も見る。活動寫眞も毎週一回位行くと云ふ風で、餘り落付いて勉強する方でも無い。嘗て、修身・教育と外に何か合せて三科目の免許狀を得て地方の師範學校へ赴任した人の受驗記に、在京三年間、未だ、一度も向島の地を踏みたることなしと云ふのがあつて、熟〻其の勤勉に敬服したが、私には所詮出來難いことと思つた。斯かる次第で、私の讀んだ書籍の數は甚だ尠ない。尤も、私は、見るだけはかなり多くの參考書に目を通したが、稍〻精確に讀んだと思ふのは極少數である。他は殆ど素通りであつて、内容も何も頭腦の中に浮んで來ないのが多い。試驗場へ出るならば、成るべく多くの書籍を精讀して充實した實力を以て臨むがよい。多くの書を讀まないのは、誇りにも何にもならぬ。甚だ恥づべき次第であるが、物事に疲勞することの遠かな私には、到底出來ないから如何ともし難い。又無理に多讀するも、それが消化して己の知識となることは甚だ覺束ない。少數の書を比較的によく精讀するより外に、私は良法を知らないのである。

第二節　修身科參考書の選擇

獨學者の最も苦心するは、先づ第一に參考書の選擇であらうと思ふ。殊に、如何なる學科でも、短時日の間に一通りの概念を得ようとするには、極少數の書を選擇して、熟讀翫味するより外に良法は無からう。近頃、私の見た或る受驗記には、僅々七八十日間勉強して合格したと云つて居ながら、四十冊に近い參考書が擧げてあつた。八十日に四十冊ならば、二日間に一冊宛の割合である。平均一冊三百頁としても、一日に百五十頁讀まなければならぬ。一日五時間勉強する餘裕のあるものでも、一時間に三十頁宛休憩時間なしに進まなければならぬ。事茲に至つて、其の努力

の非凡なる驚くに堪えたもので、私等の如きは、聞くだけでも頭痛がして來る。そんな激烈な勉强は、とても自分には出來ない。從つて、人にも勸めたくない。文檢は、高等常識の試驗であつて、一通りの常識さへあれば、誰でも合格する。一通りの常識を養つて試驗に應ずるには、決してかゝる無理な勉强をしなくても、少數の書籍を精讀すればよいのである。

然らば、如何なる書籍を讀めばよいであらうか。參考書の選擇は人によつて違ふが、私が讀んだものを擧げて見ると、先づ修身科の方では、

教育的倫理學講義　中島力造氏著
倫理學史十回講義　中島力造氏著
東洋哲學大綱　宇野哲人氏著
孔子研究　蟹江義丸氏著
日本倫理史　有馬祐政氏著
國民道德概論　井上哲次郎氏著

これ位のものを、中心として精讀した。其の代り、此の數冊の本は、何度も何度も繰り返へした。要綱をノートへ拔萃して譜記を力めた。併し、讀んで居る中には、これだけの本では少々物足りなくなる。例へば、中島博士の「教育的倫理學講義」は、初學者には至極都合のよい本であるが、餘り簡單過ぎる。又、有馬氏の「日本倫理史」は、學說の大要を知るにはよいが、獨立學派が無い（私の讀んだのは、早稻田大學講義錄）と云ふやうに、自然、他の書籍を參考にしなければならぬやうになる。私は、以上の數冊を精讀し、之れを補ふに、左の如き書を以てした。

倫理學要義　吉田靜致氏著
主觀道德學要旨　藤井健治郎氏著
倫理學講義　桑木嚴翼氏著
西洋哲學史要　波多野精一氏著
倫理學史綱　北澤定吉氏著
參考東洋倫理　岩橋遵成氏著
支那思想發達史　遠藤隆吉氏著
日本陽明學派の哲學　井上哲次郎氏著
日本朱子學派の哲學　井上哲次郎氏著
日本古學派の哲學　井上哲次郎氏著
實踐倫理講義　吉田・佐藤兩氏著
實踐倫理學　豐島要三郎氏著

之れを要するに、前に擧げたものを基本とし、後に擧げたのを參考とし、要點を摘出したノートを作り、其のノートを毎日代る代る讀んでは考へ、考へては讀むといふやうにしたのである。勿論、私は、此の外にも尙ほ多くの書

を見た。けれども、それは、何れも所々必要な部分だけ拔き讀みをしたので、全卷を通讀したのではない。其の他に尙ほ、

哲學大辭書　同文館發行

これが大分助けになつた。或る意味に於て、試驗の爲めに最も役に立つのは、此の辭書かも知れない。それから又

師範學校修身教科書　吉田靜致氏著

を是非讀んで置くことである。每年豫備にも本試驗にも各〻一問題づゝ教案の書き方が出る。かゝる種類の書を一二種目を通して置かなければ、案外な所で躓くことがないとも限らぬ。私は、これを讀んで出なかつたから、豫備試驗・本試驗兩方とも、頗る珍妙な苦しい教案を書いてしまつた。教育雜誌なども一二冊は見る必要があらう。けれども、私は、教育雜誌の記事を殆ど讀んだことが無い。倫理を研究する者には、哲學・社會學・生物學の如き基礎たるべき諸學科の知識もなければならぬが、これは檢定試驗とは別問題である。

第三節　法制經濟科參考書の選擇

次に、法制經濟の參考を擧げて見よう。元來、此の科は、教育科・修身科よりも研究がし易い。法制經濟と云へば、範圍は非常に廣い。けれども、文檢は、專門の法律家や經濟學者の如き深い知識を望むもので無いから、矢張り修身と等しく、餘り多くの書を讀む必要は無い。殊に、此の科は、性質上記憶を要する事項が多く、修身や教育よりも、或る意味に於て、迥かに徹底した學科であるから、少數參考書精讀の必要は、修身・教育以上である。

此の科を研究するには、最初に

法制經濟教科書　寶文館發行

を讀んで置くが都合がよいと思ふ。此の中には、法制經濟の全體が網羅されて居るから、つまり此の教科書だけの理解が出來ればそれでよいのである。しかし、此の教科書を理解するのは中々骨折である。私などは、五度も六度も讀んだけれども、一向わからずに濟んでしまつた。

法制經濟教科書は、寶文館發行のでなくともよい。中學校・師範學校で使用して居るものならどれでもよい。夜店へ行けば、古本二錢位で買へる。法制經濟教科書により、此の學科の大綱を知つた後、法制と經濟との各部に立入つて、少し詳しく讀む必要がある。それには、次の書がよからうと思ふ。即ち、法制の方では、

法學通論　織田萬氏著
憲法篇　清水澄氏著
日本行政法大意　清水澄氏著
民法講義　梅謙次郎氏著

此の外には殆ど讀むに及ばぬと云つてもよい。多く讀むに越したことは無いが、試驗には必要が無い。法學通論で法律全體の知識を得て置いて、其の中の憲法・行政法・民法だけを更に少し深く讀むのである。刑法・訴訟法・商法・國際法などは、今迄餘り問題に出たことがないから、法學通論だけでよい。法學通論も、私は、織田博士のを讀んだ

が、これは、岸本博士のでも、岡田博士のでも、大差はあるまい。憲法は、清水博士のが初學者には一番よい。「憲法篇」は、少し詳し過ぎるが、憲法だけは、此の本を讀んで置くがよからう。上杉博士・美濃博士の學說の相違點位は知つて居る必要がある。行政法は、餘り大部なものよりも、簡單なものを精讀した方がよいと思つて、清水博士の「日本行政法大意」だけを讀んだ。一體、私は、行政法は嫌ひであつて、讀む氣になれぬ。故に、本試驗には、筆答も口答も滅茶々々であつた。民法は、梅博士の講義がよくわかるが、それのみでは少し足りない。他に一二冊參照するがよい。富井博士のでも石坂博士のでもよい。法律の方は、ノートを作るには及ばない。ノートよりも遙かに都合のよい本が出來て居る。清水書店發行の「法律要覽叢書」である。私は、同叢書中、左記のものだけをノート代用として反覆した。

憲法要覽　一冊
行政法要覽　一冊
民法要覽　四冊

此の要覽は、諸家の說を拔萃し、蒐集したもので、非常に參考となる點が多い。私は、これを幾度か繰り返したが、勿論、全部に亘らず、必要な所だけに止めて置いた。

經濟の方は、殆どよい本が一冊もない。私は、左の三冊を讀んだ。

社會經濟學　金井延氏著
財政學　田中穗積氏著
日本經濟政策論　神戸正雄氏著

經濟原論は、以上擧げた中の金井博士の本を中心として、左の書を參照してノートを作つた。

經濟學問題解說　吉田舜天丸氏著

此の書は、金井博士の書を補說したやうなもので、誠に都合のよい本である。財政學は、早稻田講義錄中の田中穗積氏のを讀んだが、あとで見たら、

財政學　堀江歸一氏著

と云ふよい本があつたのに、試驗前に一讀しなかつたのは、殘念であつた。應用經濟は、神戸博士の「日本經濟政策論」を讀んだ。此の書は、著者の京都に於ける講演筆記であるが、日本に關係ある經濟上の諸問題が簡單に論じてある。政策の方は、よい本が見附からないから、これにしたのである。最も他に田尻博士の「日本財政經濟策」（某雜誌の增刊）を古本屋で探して來て神戸氏のと併せて讀んだ。外に時事問題は、「東京朝日新聞」の社說などを切拔いて置いて讀んだ。先づ受驗に必要な當面の參考書としては、これ位なものであらう。

第四節　參考書の讀み方

以上擧げた參考書は、受驗の爲めに、特に熟讀したものであるが、其の外にも大分いろいろな本を見た。けれどもそれは、たゞ、一讀しただけに止まつて居た。中には目錄だけ見て置いたのもあつた。それ等の書名は、今一々思ひ

出せぬ。且つ又、內外教育評論社發行の「受驗指針」に、發行所から定價迄詳しく出て居るから、それを見ればわかる。修身と法制經濟とは、並行して讀んで行つた。これは、物に脈きやすい私には、學科に變化があつて面白かつたが、試驗となると案外苦しかつた。殊に、私等の如き中等教育を受けない初學者に、二科目並行は無理である。中學校なり師範學校なりで、一通り講義をきいた素養のある人には、二科目でも三科目でも平氣であらう。倫理學とは何ぞや、法學通論の目的などから、新に出發して行くものには、二科並行は中々骨が折れる。さうして、其の割合に效果はない。試驗は、一科目づゝの方が樂でよい。最も優れた頭腦のものか、特別な勉强家ならば知らず、記憶力の薄弱な遊ぶことの好きな我々には、少々手に餘るのである。

修身と法制經濟とは、並行して進んだけれども、其の間に、各〻順序は定めて置いた。修身の方は、倫理學・西洋倫理學史・東洋倫理學史・日本倫理學史・國民道德・實踐倫理といふ順序を取り、法制經濟の方は、法學通論・憲法・行政法・民法・經濟原論・財政學・應用經濟といふ順序を取つた。此の順序は、努めて誤まらぬやうにした。

法律を除くの外は、何れもノートを作つた。これは、誰の受驗記にもあることであるが、初學者には相當に效果のある方法と思ふ。殊に、修身の中の東洋倫理の如き、どの本を開いて見ても、とんと要領を得ない。太極がどうだの、陰陽がどうだの、理同氣殊だの、心卽理だの、何回讀んでも要點を把捉し難いものは、ノートに縮約して、十分に了解の出來るまで讀み返して見るより外に、よい方法は無かつた。「四書」の中でも、「大學」や「中庸」は、稍〻系統も立つて居るから、一二回讀めば大體了解も出來るが、「論語」の如き片々たる語錄に至つては、讀む時には十分理解したつもりでも、扨て頭腦に殘るものは何もない。そこで、私は考へて、蟹江博士の「孔子研究」、有馬祐政氏編「孟子言行錄」、遠藤博士著「支那思想發達史」、岩橋遵成氏著「參考東洋倫理」などを參考として、東洋倫理のノートを作つた。其の中には、支那の古代倫理思想から、「四書」の研究から、朱子學・陽明學の大要から、近代の支那思想に至るまで、一切萬事を包括せしめるやうにした。それを讀めば、「論語」も「孟子」も特別に讀まなくてもよいやうなものを作つた。さうして、それを繰返した。其の他、倫理學・西洋倫理學史・國民道德・實踐倫理等、何れも一冊づゝノートを作つたが、他は、何れも東洋倫理程苦心しなかつた。法制經濟の方は、經濟原論だけノートを作つたのみである。これは、前に述べた如く、法律の方は、ノートよりも都合のよいものが出來て居るから、それを代用したのである。財政學や政策は、ノートを作るまでもないと思つたから止めた。

最初に云つた通り、修身・教育・法制經濟の如き學科は、不向な所以か、讀書して居ても、わかつたやうでわからぬやうで、まるで有耶無耶な時が多い。さうして、私は、少しでも疲勞すると必ず勉强は中止してしまふ。從つて、外の人の如く、何時から何時までと時間を定めて讀書すると云ふ事は無い。極めて不規則な勉强である。其の代り、氣の向いた時にのみやるから、頭腦を痛める心配は無い。健康を害してまでも讀書したくはない。試驗を、それ程重大なものと思はない。

第五節　修身科の筆答試驗

筆答の方は、豫備も本試驗も程度に於て變りはないと思ふ。本試驗の方が豫備よりも、少し程度が高いと云ふもの

もあるけれども、私は、さう考へない。畢竟、これは同じことを二度繰り返して確めるに過ぎないと思ふ。私の答案は、修身も法制經濟も、共に豫備と本試驗を通じて間違ひだらけのお話にならぬもので、あの實際答案を共の儘掲げたら、頗る滑稽であらう。

今年の問題は、修身の豫備が、

一、快樂主義と自然主義との異同を論ぜよ。

二、理想と善との關係を說明せよ。

三、國民道德の特色如何。

四、「誠者。天之道也。誠之者。人之道也。」の意義を說明せよ。

五、伊藤仁齋の倫理說と物徂徠の倫理說の異同を論ぜよ。

六、意志修養に就いて教案を作れ。但し二時間。

の六問であつた。試驗場で問題を受取つて一讀するや否や、私は、先づ第一に、(六)の教案を書いた。私には教案が最も書けないから、思ひ切つて先に書いてしまはうと思つたからである。吉田靜致氏の「修身教科書」を讀んで置けば、何の苦もなしに秩序正しく書ける筈であつたのに、私には、それが讀んで無かつたから、止むを得ず、自己流の出鱈目を書いてしまつた。あとで考へたら、隨分亂暴なもので、おまけに大切な「學年」を落して居た。次に(三)(四)(五)を書いたが、(二)へ移つた時には、既に、餘す所一時間が少し足りない。大急ぎで(二)を終つたが、(一)は、何を書いてよいか一向わからない。止むを得ず、快樂主義の解釋、自然主義の解釋と怪しげな事を並べ、最後に兩者の異同として書くことは書いたが、僅かに四五行。龍頭蛇尾と云ひたいが、これでは、徹頭徹尾ものになつて居ないのを自覺した。

本試驗の問題は、次のやうであつた。

一、倫理學の特質を列擧して之れを論ぜよ。

二、「カント」の所謂「無上命法」の意義を說明せよ。

三、國體と國民道德との關係。

四、儒者は三種の神器を如何に道德上より說明せしか。

五、倫理學上より大學の三綱領を說明せよ。

六、國交に就いて教案を作れ。(但し最上級二時間)

右の中、(二)(三)(五)は、どうやら書けさうであつたが、(一)の倫理學の特質とは何を書けばよいかわからない。仕方がないから、中島博士の「教育的倫理學講義」の序論にあつた、倫理の本質を書いて置いた。(四)の問題には最も困つた。今まで、殊更にかゝる問題に就いて考へて見た事もないので、やむを得ず、小學校の教科書にでもありさうな說明をして置いた。(六)の「國交」も、「修身教科書」を讀んで居なかつたので、自己流の、國際道德の意義だの、國民外交論だの、國交斷絶だの、將來の國是だの、愚にも附かぬことを長々と書いて置いた。

第六節　法制經濟科の筆答試驗

法制經濟科の豫備試驗は、これも例年の如く、四問題であつた。

一、帝國憲法の保障したる臣民の權利を略說すべし。

二、左の語の意味を說明すべし。

1、法人　2、所有權　3、不當利得

4、正當防衛　5、手數料

三、過剩生產の意義及び其の實在如何。

四、分配の公正な論すべし。

どの問題も少しづゝは書けさうに思つたから、順次に、筆を執つた。(一)は臣民の權利を請求權・自由權・參政權に三大別し、更に細しく書いて行つたが、困つたことには自由權中の二三を忘れてしまつて、どうしても考へ出せない。そこで又々當推量で書いて置いたが、後で考へたら途方もない誤謬であつた。(二)では、不當利得と正當防衛との說明が全然出來て居なかつたが、あとはどうやら大した誤まりもないと思つて居た。(三)は普通に出來たが、(四)は金井博士の本にある分配制度の三主義を書かずに、自己流の論文を書いて置いた。此の科は四問題三時間であるから、修身よりも餘程時間の餘裕が多かつた。

法制經濟科の本試驗は、

一、營造物の觀念を說明すべし。

二、公權と私權との區別を述べ且つ私權の分類を擧げて之れを簡單に說明すべし。

三、戰費の支辨は租稅と公債との何れに依るを可とするや。

四、恐慌とは何ぞや。

の四問、時間は四時間である。四問四時間は大によかつた。けれども、問題は何れも皆私には苦痛であつた。(一)の營造物の觀念は、嫌ひな行政法と來てるから書けないのも無理はない。あとで考へたら、營造物の觀念中、最も大切な「權力の作用によらず」「公衆の使用に供し」等の解釋が落ちて居た。これでは、此の問題の答案として殆ど零に等しい。(二)の問題は、公權・私權の區別だけは出來たが、私權の種類は、大間違ひをやつたので、此の問題も半分駄目であつた。(三)は何を書けばよいのか一寸見當が附かなかつたが、大方租稅と公債の利害得失を論ずればよからうと思つて、(イ)戰費の性質、(ロ)租稅と公債の利害得失、(ハ)結論と項目を分ちて、自己流の曖昧な議論をして置いた。(四)は餘り難問とも思はれなかつたが、恐慌の種類と政策を書かなかつた。

以上通じて考へて見ると、四問とも半分は出來て居ないと思つた。合格などは所詮思ひも寄らなかつた。

第七節　口述試驗

口述試驗は筆答試驗より尙ほ一層成績不良であつた。一體、私は、言語で發表するのが誠に不得意である。殊に、人の前では巧みに話せない。敎育の時にも頗る困つたが、今回は、兩方とも尙ほ一層甚だしかつた。試驗後、二三の友人とも話して見たが、自分程奇妙な答を發したものは一人もなかつたらしい。又口述試驗の實際などを讀んで見ても、自分程成績の惡いのは殆ど皆無である。修身の時には、「武敎講錄」も知らなかつたが、「善種學」も知らなかつた。法制經濟の時には、「官吏の意義」も云へなければ、「小學校敎員」の官吏であるか無いかも云へなかつた。親權の內容も、戶主權の性質も怪しいものであつた。修身の方は口述試驗で失敗した者が一人も無かつたから、其の方は總花の餘榮としても、法制經濟の方は、筆答試驗の成績を發表せず、全部口述試驗を行ひ、兩方の點數を合算して、成績を決定すると云ふことであつたから、筆答が半分も出來ず、口述も全然零であつた自分が合格しようとは思つて居なかつた。

第八節　受驗後の所感

要するに、私は、不正則な學歷を有する者の初發的段階として文檢受驗を試みたのみに過ぎない。すべて、文檢のみには限らないが、試驗の合格と不合格は、左程重大な問題ではない。人物の大成が生涯に於ける最高の目的である。一回二回の試驗に通過して免許狀を得れば、能事終れりとするが如きは、私の贊成せぬ所である。愈〻奮勵努力しなければならぬ。私は、語るを恥づる程不良な成績を以て試驗を終つた。從つて、試驗其のものの合格に就いては、何等の意義も認めない。けれども、此の後大に努め勵みて、生涯の中には少しでも何かの事業をなし遂げたいと云ふ抱負と希望だけは持つて居る。

世には文檢の合格位で得意になつて居る者の案外に多いのを不思議に思はざるを得ない。最もそれ等の人々は、私等の如き曖昧な受驗者とは異なり、相當に自信ある合格者には相違なからう。それにしても、一二回試驗が終つたからとて、成功の秘訣まで說くに至つては恐れ入らざるを得ない。且つ堂々と受驗記を書いて、碌々讀みもしない參考書百冊以上も列記する僞善者もある。私の考へでは、試驗は、ほんの初期の試みであつて、試驗後の勉强が最も大切であると思ふ。文檢試驗の通過を成功の如く心得て、直に奉職口を探し、幸に奉職すれば、それで讀書を廢するなど、餘り自己の將來を思はね振舞ではあるまいか。

世にはまた文檢などを幾科目も受けるのを自負して居る者がある。中には、五科目も六科目も受驗するのもあるさうである。かゝる人は、一見誠に感ずべきに似て、其の實不見識笑はざるを得ないのである。免許狀を五枚も六枚も持つて居る事が何の役に立つか。古、西洋には六十餘箇國の言語に通じた僧侶があつた。文豪バイロンは、嘗て此の一大天才を稱して、「語學の化物」と侮つたと云ふ。六十餘箇國語に通じた此の一大天才が文化の爲めに何程の貢獻をしたのであらうか。其の事業の世に殘るものに至つては殆ど何もない。文檢などは、單に試驗に通過するのみならば、一科目平均一年位費やせば何科目でも合格出來ると思ふ。併しながら、斯くして五科目・六科目の免許狀を得たりとて、果して何程の價値があらうか。よく地方から受驗に來る人などの中には、一科目でも多く合格すればよいと思つて居る者が多い。これが抑〻乞食根性と云ふものである。世間には、文檢一科目でも相當の地位を得て立派に活動し

て居る者、否、文檢は試みなくも教育者として立派な性格を具へ、相當の修養を積んで居る者もある。免許狀を澤山所有するのみでは何にもならない。かゝる不健全な思想を放棄して、着實に勉強し、將來の大成を期することが大切である。私は、いつも此の方針を以て進みたいと思ふ。今回の試驗に於ける私の所感はそれ位のものである。

追記

以上は、十數年前に書いた受驗記を其のまゝ掲載したものである。故に、參考書の選擇などは、今日から見れば、全然別に考へなければならない。これはたゞ十數年前に同じ道を歩いた者を、偲ぶ位のつもりで御一讀ありたいと思ふ。」

第五章　倫理研究上に於ける未開の領域

本論は文檢の修身科と全然關係のないものであるが、倫理學の研究者に多少の參考となれば幸と思ふ。大正十三年頃に執筆したものであることも附記して置く。

第一節　緒言

倫理問題の學術的研究は、非常に後れて居ると予は思ふ。倫理に關する諸問題ほど、研究の餘地の多く殘つて居るものはあるまい。教育學も心理學も美學もみなまだ幼稚な學問である。經濟學等に至つては尙ほ一層甚だしい。併し、これ等の學問でも、其の根本原理の考察に、或は特殊問題の科學的研究に、種々の努力が認められる。例へば、教育學の如き、科學として成立するか否かの問題にさへも、議論のある程の狀態にありながら、輓近に至つては、科學的の研究法によつて、教育上の重要問題に解決を與へようとする教育測定といふものが、盛んに行はれて居るのみならず、實際の教授上に於ても、屢〻新說が現はれ、新方面が開拓せられて行く。此の數年來、我が國には、八大教育思想といふやうなものも起つて、兎も角も教育界の注意をあつめた。所謂八大教育思想そのものが教育の理論及び實際に及ぼした功罪は別問題として、從來の因襲的傳統に滿足せず、何等かの新らしい方面に進路を見出して行かうとする努力だけは認めてよい。常に幼稚であるとか、行き詰つて居るとか云はれて居る教育學の研究にも、かくの如き鬱勃たる力が潛んで居る。心理學に於ても、美學に於ても、また同樣である。實驗心理學の如きは、絕えず非難や攻擊の聲を受けて居るが、取近の十數年にかなり大きな業績を示した。然るに、倫理研究の狀態は如何。進歩の稚々たる、前述の諸學問に比して、更に一段の遜色がある。倫理問題研究の起原は、非常に古い。自然研究の眼を人事の考察に轉向せしめたものは、希臘のソフイストである。ソクラテスに至つては、人事問題の解決が學問の中心になつて居る。故に、倫理問題の研究は、歐洲にあつては、希臘の古代に其の端緒を發して居るのである。原始時代の人間が、素朴的な精神に感じた最大の驚異は、自己の周圍をめぐる自然の現象と、自己の內部に潛める道德の觀念であつた。自然現象の研究から、眼界を一轉した時に、道德の問題に逢着するは當然の歸結である。其の年代から云へば、自然科學と

倫理學とは、あらゆる學問の中に於て、最も進歩して居なければならぬ。自然科學は非常に進歩した。殊に、近世期に入つてから、頗る著るしい發達を遂げた。今日の自然科學は、進歩發達の點から見て、あらゆる學問の最高位にあるものと見てよからう。これに反して、倫理學の研究は、微々として振はない。その進歩發達の程度は、到底自然科學の比にあらざるのみならず、最も幼稚な學問と云はれて居る心理學や美學に對しても尙ほ遜色がある。倫理學の研究及び倫理問題の研究は、あらゆる學問の中に於て、最も幼稚なものの一と云ふも過言ではあるまい。

倫理問題の學術的研究の後れて居ることは、種々の事實がこれを證明して居る。予はこゝに我が國の倫理學界を一瞥して、かくの如く斷言するに躊躇しない者である。明治以後に於ける我が國の倫理學界には、研究といふ程の研究は殆どない。强ひて云へば、井上博士の三派哲學位のものである。井上博士の研究は、少なくもこれを我が學界の收穫として誇るだけの價値を有して居る。まとまりのつかない日本の倫理思想を、あれだけに整理したことは、驚歎すべき大事業である。惜しむらくは、井上博士の研究も未製品に過ぎない。三派哲學は、井上博士獨得のものである。井上博士の如く、古今の典籍に精通した博學の士でなければ出來ない。斷じて模倣を許さゞるものである。今日我が國の倫理思想を論ずる者、多くは井上博士の研究に準據して居る。井上博士の三派哲學が我が學界に寄與した所は多大である。併し、井上博士の三派哲學は、漠然とした日本の倫理思想の一部分を、一と通り整理したといふだけに止まつて居る。粗雜の點の非常に多いことは、蓋し何人も認める所であらう。緻密な學術研究とは思はれないものである。今まで何もない所へ不完全ながらも或るものを築き上げたのが、井上博士の功績の偉大な點である。築き上げたものが本質的に完全であるといふのではない。かく考へて見ると、明治以後の倫理學界は、寂寥の極である。我が國の學界は、出發點に於て歐米諸國のそれに後れて居る、歐米諸國に比して遜色あるはやむを得ない。されど、自然科學の方面、醫學の方面に於ては、世界の學界を驚かすべき特殊の研究が、邦人の手によつて幾度か企てられた。倫理學界の如く惰眠を貪つて來たものはない。世界の倫理學界共のものが既に沈滯して居るのであるが、其の中でも我が國の倫理學界は殊に甚だしい。我が國の大學には、倫理學の講座といふものがあり、其處には倫理學を講ずる教授と、其の講義を聽く學生とがある所を見れば、倫理學を研究して居る學者も、世の中に若干はある筈であるのに、從來更に學問上の業績が現はれないのは、怠慢といふべきか、無能といふべきか、何れにしても不面目極まる話である。從來に於ても、今日に於ても、倫理學に關する譯書は時々出る。譯書の出るのはよいことである。外國の諸說を紹介するは、我が國民の知識を豊富ならしめ、學問の進歩をはかる有力な手段である。學者が忠實な飜譯に力を盡すのは貴いことであるが、飜譯のみが唯一の仕事であつては情ない次第である。予の知れる老大家の中には、外國の書物を飜譯し、其の說を紹介することのみを學問と考へて居る者がある。舊幕時代の漢學者が、漢籍の訓詁註釋のみを學者の任務として居たと同じである。飜譯が盛んに行はれ、若干の譯書が出たといふことは、我が學界の爲めに少しも誇りとならぬ。我が國の倫理學界には注目する程の特殊な研究が現はれて居ないばかりでなく、まだ一冊の完備した倫理學概論もないのである。倫理學概論と銘した書物は數種出て來る。併しながら、何れも外國の著書の燒直しにあらざれば、極めて粗雜な講義の筆記のみである。予の考へる所によれば、倫理學概論といふものには二種あるべき筈である。一は倫理學上の諸問題を最も組織的に概說し、倫理學の範圍を明かにするもの、一は自己の信ずる倫理學說を中心として、倫理學上の諸問題を論究するものである。既刊の倫理學概論は、多く第一種に屬して居る。併しながら、仔細に吟

味すると、概論としての特徴を十分發揮したものは殆どない。叙述の順序は亂雜、組織も分節も頗る曖昧、概論と名づけながら、重要問題を逸して、一部分の管見を述べて居るものが多い。甚だしいのは首尾の一貫を缺ける無責任な著書もある。大西博士の「倫理學」の如きは、概論として優れた點を有して居る。學說の批判に偏した傾きはあるが、博士の冷靜な鋭い頭腦によつて、諸說を一々篩にかけ、其の長所と短所とを明瞭に書き分けた所は、實に鮮かなものである。併し、大西博士の「倫理學」は、未定稿に終つて居る。倫理學概論として完備したものではない。倫理學概論を著はさうと思ふ程の者ならば、概論の意義を豫め明瞭に考へて見る筈である。然るに、概論として出て居るものが、更に概論らしくないのは、著者の無識か無能を自證するものである。一卷の概論さへ出ない倫理學界であるから、其の他は推して知ることが出來る。かくの如き蔑々たる倫理學界に、實踐道德を指導する程の權威ある學說の出ないことは、これまた當然の話である。道德は文化の中心をなせるもの、道德的生活によつてのみ、人間は生存の意義を全うして行くことが出來るのである。これ予の獨斷論にあらず、道德の本質から生ずる明かな結論である。故に、道德は人類の生存に力を與へるもの、道德を理論的に研究する倫理學は、人生に光明を齎らすものでなければならぬ。然るに、今日ではそれが全然反對になつて居る。倫理學の如きものは無用の長物と認められ、偶〻道德を論ずる者があれば、道學者などと稱し、頑迷不靈の標本として扱はれる。人類の生存は、日毎に複雜になつて行き、種々の方面に種々の問題が續々と發生する。倫理學が解決して行かなければならぬ問題も少なくないが、倫理學者は、徒らに手を束ねて傍觀して居るのみである。今日でも倫理學說が全然現はれて居らぬのではない。現に同圓異中心主義といふやうなことを主唱して居る者もある。されど、かくの如き學說は、詭辯論的名辭に多少の好奇心を喚起する力をもつて居るかも知れないが、生きた人間の世界には一顧の價もなきものの如く、激しく渦卷く世相の火焰の中に、日中の星のそれよりも鈍い光を放つて居るに過ぎない。人生の燈明臺となつて、生存に意義を與へて行かなければならぬ倫理學は、却つて人生のために引きづられ、疲れ衰へて其の存在の姿までも失はんとしつゝある。予は、こゝに現代の倫理研究が人生に對して如何なる權威を有するか、卽ち、倫理學の効益を闡明せんとする者でない。たゞ倫理の研究が後れて居ることの例證として此の問題に論及したのである。

倫理問題の研究が稚々として進まざるため、疾に審議せらるべくして、未だ其の緒に就かないものが非常に多い。換言すれば、倫理問題の研究ほど未墾の領域の廣いものは少なからう。一々それを詳述することは出來ないが、左に二三の問題を擧げて卑見を述べる。

第二節　倫理問題の科學的研究

——（科學的倫理學の建設）——

今日の倫理學者は、殆どみな倫理學の性質を論じて、「倫理學は科學である」と定義して居る。總べての學問を科學として形而上學から分離せしめるのは、近世に於ける學界の趨勢である。予は「倫理學は科學なり。」といふ定義を是認しない者である。倫理學は道德の理論的研究である。道德の理論的研究には、科學的方法によることを得るものと、然らざるものとある。科學とは、科學的の對象を科學的の方法によつて闡明するものであるから、倫理學の中に

は、科學の領域と科學以外の領域とある。從つて、「倫理學は科學なり。」と斷言することが出來ないのである。其の對象の如何を論ぜず、總べてのものを悉く科學の範圍に抑留せんとするは、近世に於ける科學萬能主義の惡弊であると予は信ずる。學問の性質を論ずるのは、本論の目的でないから、詳述を避けるが、予は、科學といふものを學問の一部に認め、或る特定の對象を、或る方法によつて、研究するに過ぎないものと解釋する。倫理學は科學であるといふやうな定義には贊成しないが、道德の研究に科學的方法を適用する部分の存在することを信ずる。此の方面のみに着眼して、科學的倫理學を建設することの可能を疑はない。而して、それは、倫理研究上、極めて肝要な問題であると思ふ。

予の常に不審として居るのは、今日の倫理學者が異口同音に倫理學の性質を論じて科學であると定義しながら、一人も科學的倫理學を說いて居ないことである。試みに十數卷の倫理學書を繙讀して見るがよい。それに記述してあることが科學の性質をもつたものであると、斷言し得るであらうか。定義のみは科學として置きながら、全く科學にあらざる倫理學を說いて居る。若しそれを科學であるといふならば、多くの倫理學者が描いて居る科學の概念といふものを察するに苦しむ。例へば、或る倫理學者の著書には、人生觀を其の一章に置いて居る。人生觀の如きものが果して科學の對象となるであらうか。古今東西の人生觀を資料としてこれを科學的に研究することは出來る。されど、人生觀そのものの研究は、科學の範圍を脫して居りはしないか。倫理學の性質を科學と斷定して置きながら、人生觀等を其の中に論ずるは、首尾の一貫せざるものである。その他、良心論・自由意志論等に於ては、全然哲學に屬することが、何れの倫理學書にも縷々として述べられて居る。加之、全體の內容が既に科學的の色彩を帶んで居ないものも

尠なくない。科學の成立には、特定の對象と特定の方法が必要である。如何なるものを如何なる方法で研究しても科學が成立するとは云はれない。科學的倫理學の對象は、道德の事實卽ち現象としての道德でなければならぬ。現象以外のもの、卽ち、道德の根本原理、註解すれば、道德の價値、道德の實在性を論ずるものは、科學的倫理學の範圍を脫して居る。科學的倫理學の研究方法は、他の科學と同じく、觀察及び實驗によらなければならぬ。思索的に人生の目的や道德を論ずるのは、科學的倫理學の精神に反する。科學的に倫理學を組織するには、科學的の對象と科學的の方法とを定め、其の對象を其の方法によつて闡明して行かなければならぬ。今日の倫理學は、定義のみに科學と銘を附し、實質上に於て科學たる性質をもつたものがない。科學的倫理學の建設は、倫理學上に於ける重要問題の一つである。」

第三節　倫理哲學の研究

倫理哲學はまた道德哲學とも云ふ。倫理問題の哲學的研究である。科學的哲學と相對し、倫理學上の一分野を占めて居るものである。倫理哲學の科學的倫理と異なるのは、其の對象と研究方法による。科學に科學の對象があるが如く、哲學には哲學の對象がある。科學に科學的研究方法のある如く、哲學には哲學的研究方法がある。哲學的對象を哲學的方法によつて研究することは、科學的對象を科學的方法によつて研究することと、毫も矛盾しないのである。科學の存在は哲學の成立を妨げない。哲學的倫理卽ち倫理哲學は、科學的倫理學と共に成立するものである。

今日の倫理學界を見るに、倫理問題の科學的研究も出來て居ないが、倫理哲學の研究も、著るしく輕視せられて居る。或る一派の倫理學者は、道德的價値の研究を倫理學の目的とし、思索的な價値論によつて、倫理學の體系を構成して居る。かくの如き倫理學は、明かに倫理哲學の一種に屬するものである。されど、倫理哲學は、道德的價値の研究のみを以て其の內容とするものではない。哲學とは何ぞや――の問題は、今日でも尙ほ學者間に異論のあることである。從つて、倫理哲學とは何ぞや――といふことにもまた定論とすべきものはないのである。併し、哲學には認識の研究と實在の研究と價値の研究との三方面が含まれるものと予は信ずる。故に、倫理哲學は道德的價値の研究の外に、道德的認識の研究や、道德的實在の研究を、其の內容の中に包含して居なければならぬと思ふ。單に道德的價値を論ずるのみで、認識や實在の方面を除外したものは、完全な道德哲學の體系と認められぬ。

今日の倫理學は、自ら科學であると稱しながら、科學の特徵を有して居らず、さりとて全然哲學的の色彩を帶べるものでなく、科學と哲學との交錯した一個の獨斷私見に類するものが多い。或る倫理學者の如きは、はじめに倫理學は科學であると云つて置きながら、科學によつて倫理問題を悉く解決することの出來ないのを感じ、「倫理學は科學であるが、究竟は哲學に接觸するものである。」といふ苦しい說明をして、自由意志論や理想論を述べて居る。かくの如き廣汎な倫理問題の研究を科學若しくは哲學の何れかに限定しようとした結果から生ずる矛盾である。科學とか哲學とかいふものが、獨立して他を排するものでなく、對象と方法とによつて分れる學問の分野に過ぎないことを知らず、倫理問題の中には、哲學的對象と科學的對象との存在することを辨へず、あらゆるものを悉く科學的に說明しようとする科學萬能主義の夢から生れた錯誤である。哲學と科學とに關する正しい解釋が倫理學者にない爲め、今日の如き怪しげなものが現はれて來たのである。哲學と科學との限界を定めて、科學的方面を大に發達せしめ、科學的倫理學を建設すると共に、哲學的研究も進め、倫理哲學の體系を作ることが必要である。

第四節　道德的意識の調査

少し特殊な問題を擧げて見れば、今日の倫理學界に於ては道德的意識の調査が全然出來て居ない。これは科學的倫理學の一部に屬する。先年、東京高等師範學校の附屬小學校で、多大の勞力と費用とを拋つて、兒童の道德的意識を調査し、その結果を一卷の書物として發表したことがある。調査の方法とまとめ方とに就いては、大に異論もあつた。されど、此の計劃が貴重な資料を倫理學上に提供したことは、何人も認めざるを得なかつた。かくの如き計劃は、倫理學の研究者によつて續々と企てられなければならぬことである。併し、我が國の倫理學界からは、嘗て注目に價する調査報告の出たことがない。

道德的意識の研究は、兒童のそれのみを必要とするものではない。青年の道德的意識、成人の道德的意識、老人の道德的意識、何れもみな科學的の考察を要する。たゞ年齡上に於ける道德的意識の相違のみならず、男女の性別による道德的意識の相違、階級及び職業別による道德的意識の相違等、一として重要ならざるはない。貧富の懸隔が日每に甚だしくなるにつれて、所謂有產階級と無產階級との間に種々の葛藤が起る。それは、既に今日顯著な事實となつて現はれて居る。然るに、階級の道德的意識に關する研究が、倫理學者によつて企てられないのは、頗る遺憾なこと

と云はなければならぬ。

道德的意識の科學的研究が、如何に困難なことであるかは、先年の高師附屬小學校の計劃に徵しても明かである。完全な調査に至つては、絕對に不可能であるかも知れない。されど、調査が困難であるからとて、徒手傍觀して、いつまでも着手せずに居ることはよくない。

第五節　道德の發生學的研究

發生學研究といふ言葉は、當らないかも知れない。道德の發生の學理的研究、道德變遷の學理的研究、これも亦倫理學上に於ける重要な題目の一つである。此の問題は、全然未墾の領域であるとは云はれない。民族心理學上から道德を見た者もある。また道德の起原に就いて說をなせる者は少なくない。

道德といふものが如何にして生じたか。而して、如何にして發達して來たか。道德が人間の社會に發生し、人間の社會に於て發達したことは明かな事實である。此の事實を疑ふ者はない。かくの如き明白な事實が存在する以上、これに向つて學問上の吟味を加へることが心要である。然るに、今日道德の發生及び變遷の研究に、あまり注意が拂はれて居ないのを不思議に思ふ。

道德はあらゆる人間の社會に存在するものである。社會卽ち環境によつて、人間は道德の實踐方法を異にする。世界各國の人々は、それぞれ異なる環境の中に生存して來たのである。世界の人類に就いて、一々道德の起原及び變遷を科學的に考察することは、非常な大事業である。ヴントの如き學問の該博な精力の絕倫な人でなければ出來ない。つまらない原本を探しては紹介するだけの我が國の學界に、大きな研究の現はれないのも無理はない。

少し範圍を狹くして、我が國に於ける道德の發生と變遷だけでも、科學的な態度を以て研究する必要がある。

第六節　文藝の倫理的考察

我が國に於ける多くの倫理學者は、文藝といふものにあまり冷淡過ぎる。文藝に注意して居る倫理學者が幾人あるであらう。藤井健治郎氏の「主觀道德學要旨」の中には、何處かに通俗小說が例に取つてあつたから、倫理學者が小說を讀まないとは云はれぬ。されど、倫理學上に於て、最も注意しなければならぬ文藝が、殆ど輕視せられて居ることは事實である。藝術と道德とは、同じ人間の理想の表現でありながら、相對的に見ると稍〻其の立場を異にして居る。文藝は道德を敎へるための方便でもなければ、道德を具體化した物語でもない。併し、文藝は、內容をもつて居る。其の內容を倫理的に考察することは十分に出來るし、またそれは極めて必要なことである。文藝の倫理的考察といふのは、よく世間にある偏狹な道學者の文藝に對する非難を意味して居ない。偏狹な眼を以て文藝を罵倒したり、青年男女に對して小說を讀むことを禁じたりするのは、藝術に對する冒瀆にもなり、道德其のものの權威を自ら失はしめる所以である。而して、結局、文化の進步を阻害するのみに止まるものである。予がこゝに云ふ文藝の倫理的考察とは、古今東西の文藝が含んで居る內容を解剖して、倫理的に考へて見ることである。文藝は、道德のために生れた

ものでない。創作家が小說なり劇なりを書くのは、自分の信ずる道義の觀念を、人に强ふるためでは勿論ない。創作の動機は、藝術的衝動の刺激である。併し、創作家共のものは、或る時代に生きて居る人間である。創作に時代の背景が反映して來ることは明かである。ゲーテの作品には、ゲーテの生きて居た時代の背景が反映し、近松の淨瑠璃には、元祿時代の世相が現はれて居る。時代の反映は、また時代の道德の反映である。道德といふものは、常に人類の生活の中心となつて行くからである。文藝上の作品に反映した道德の考察は、倫理學上にも種々の示唆を與へる。道德史の研究上にも必要なことであり、道德と藝術との本質を考察する倫理哲學上にも貴重な資料を提供するであらう。

文藝の倫理的考察も容易なことでない。予は近松悲劇の倫理的考察をして見たいと思ひながら、既に幾年か躊躇して居る。またトルストイの如き道義の觀念の明白に現はれた作家のものは、倫理學上に於ても特に注目する必要を感じて居るが、中々容易に手が着かない。尤も予の如きは、倫理學者を以て自任する者ではない。興味本位に生きて行く學究的性質を缺く者に出來ないのは、咎めるのが無理ではあるが、世の倫理學者と云はれて居る人々、倫理學を講じて生活して居る人々にとつては、此の未墾地を開拓すべき責任があらう。

第七節　道德史の研究

道德史の研究もまた全然出來て居ない。道德史と名づけた書物は時々出るが、眞の道德史、即ち、道德の變遷を叙述したものはない。我が國の例を見るに、古くは湯本武比古氏と石川岩吉氏との共著に成れる「日本倫理史稿」といふのがある。併し、これは倫理即ち道德の理論、換言すれば、道德の思想の方面の變遷を叙述したものである。道德の事實を沿革的に闡明したものではない。最近に出た伊藤千眞三氏の「日本國民道德史」はまだ見ないからわからない。井上博士は、日本の國民道德に體系を與へた効績者である。井上博士の著書には、かなり該博な歷史的研究の一端が現はれて居る。併し、井上博士の國民道德も多く思想の方面に止まつて居る。道德事實の變遷は、僅かに通常の歷史の局部に現はれて居るのみで、まとまつた研究として公になつて居るものはないのである。此の方面に新らしい研究を企てゝ行くことも、倫理學徒として必要なことである。

倫理問題の研究上に於ける未開の領域は非常に廣い。こゝに一々列擧することが出來ない。以上は僅かに數例を示したのみに止まる。

倫理學研究者のために　終）

修身科講座　終

昭和七年十月十日印刷
昭和七年十月十五日發行

〔修身科講座〕
定價 金六圓八拾錢

著者 三浦藤作

發行者 東京市本郷區彌生町三番地 曾根松太郎

印刷者 東京市麻布區森元町一ノ二七 岩船忠太郎

印刷所・東京・麻布・安心堂印刷所

不許複製

發行所 東京市本郷區彌生町三番地 合資會社 文化書房 振替口座東京二五四七三番

好評嘖々たる教育圖書

奥野庄太郎著	心理的讀方の實際	定價金參圓 郵稅金十六錢
上里 朝秀著	國史教材の價値及取扱	定價金貳圓八十錢 郵稅金十四錢
山本 正夫著	唱歌教授の實際	定價金參圓五十錢 郵稅金十六錢
關 寛之著	教授の實際に應用したる 兒童心理學	定價金貳圓六十錢 郵稅金十二錢
仲原 善忠著	世界地理精義	上卷金四圓五十錢 下卷金四圓五十錢
内田 庄次著	新國史教育論	定價金貳圓五十錢 郵稅金十二錢
同	國史學習の新展開	定價金貳圓參十錢 郵稅金十二錢
松本 浩記著	新修身教育論	定價金參圓八十錢 郵稅金十六錢
稲森鑑之助著	勞作の新學校	定價金參圓 郵稅金十六錢
同	勞作の新課程	定價金參圓 郵稅金十六錢

發行所 東京市本郷區彌生町三番地 合資會社 文化書房 振替口座東京 二五四七三番

259
639

終